テレビ・デイズ

登場人物

夫

妻

エレーナ

清彦

ヨリコ

野島

序

あなたはコンクリートの階段をのぼっている。友だちからもらいうけた一枚のチケットを左手に持って。「急用で行けなくなったから」と言った友だちのことをチラと思いつく。その友だちが自分の知らない世界を知っているような気がして、瞬時、故もない尊敬の念を抱いた。それは慣れぬ場所に向かう今の自分の臆する気持ちの裏返しだ。あなたは演劇に興味など持ったためしはなかった。

階段をのぼりきると「いらっしやいませ」「いらっしやいませ」とふたりの若い女が、チケットを切り、劇場の中に人たちを招き入れている。あなたはチケットを差し出しちが幸いして、言葉もなくそこを通りすぎた。身分不相応のもてなしを受けたような気になり、ロビーに群がる人たちを見まわしていると「どうぞ」というまた別の女の声が出て、ぶあついチラシの束をあなたに差し出している。

あ……と小さな声を出し、あなたはそのチラシの束を受け取る。その束は、一番外側が、ちようど札を九枚重ねて十枚目をニツ折りにしてその九枚をつつみ込む時のように、白いニツ折りの紙でとじられている。その白い紙にはアンケート用紙と書かれている。

「アンケートお願いします」

その女が微笑んでいる。

「今？」とあなたは尋ねた。

「いえ、終演後でけっこうです」

わかった、とばかりにあなたは束を掲げて見せた。

ロビーでは、様々な声が入り乱れている。笑顔に笑顔を返す人たちの声が幾重にも重なって聞こえている。あなたはタバコを喫える場所を捜しあて、そこに向かって歩いてゆく。どうにも奇妙な光景だ。笑顔で会話している者たち皆が、なぜか知り合いのふりをしていような気がしてくる。あなたに見せるために、今日はじめてここで会った同士なのか、以前からの知り合いのように会話をしているとあなたには見えてしまう。なぜそう見えるのか、とあなたは考えてみるが、その理由はわからない。あなたのそばの灰皿の脇で会話をしているふたりもそうだ。

「あれは結局、演出の失敗だと思っよ」

「ああ、演出のね」

「役者はそれなりに頑張ってたんだから」

「ボク、ところどころセリフが聞きとりにくいところがあつて、それがなんか気になりましたね。あれ、劇場のつくりの問題かな」

「ちがうよ、あれはわざと聞こえないような演出なの、それがしやくにさわるだろ？」

「あ、あれ、演出ですか……」

近くのソファにすわって先刻のアンケート用紙に何やら書き込んでいる若い女の子がいる。何を書いているのかのぞき込もうとすると、あなたの肩をポンとたたいて、

「ああや、つて前もつて住所と名前を書いておくんです。大丈夫、感想は終演後です。それが彼女の流儀なんですよ」と、あなたのすぐ横でタバコを喫ってた男が言う。ちょっと待てよ、オレとあんたは肩をたたき合う程の仲じゃないだろ、と言おうとするが、男はその時、嘘の知り合いを見つけたらしく、あなたのもとを離れてゆく。以前競馬場で当り馬券をそのつど見せる男がいたことを不意にあなたは思い出す。あの男も、いつの間にかオレのそばからいなくなっていた……。

あなたはもらったチラシのうちの一枚を見る。裏返すと『作者の言葉』というのがある。読んでみる。

「世界のグロテスクを確認するために私は演劇をやっている。グロテスクであるとは、具体的であるということだ。目を閉じる。目を開ける。その時見えるあらゆるものは具体的である。それ自身であり、それ以上のものでもそれ以下のものでもない。にもかかわらずわれわれは、或るものを美しいと感じ、別のものを醜いと感じる。以上であり、以下である」と判断するのだ。人間がそうすることを私は『生きる事情』と呼ぶ。私が演劇でやろうとすることはその『生きる事情』をかかえた人間と物たちの、それでも具体的でしかありえないおかしみである。

どんな美しい女の顔も具体的であるという意味においてグロテスクなのだ」（岩松了）

あなたはチラシを裏返す。

芝居のタイトルは『テレビ・デイズ』とある。どうもこれからやる芝居のチラシのようだ。

ふと気づけば、まわりにいた人たちがゾロゾロと劇場のドアの中に入ってゆく。

「まもなく開演です」

チラシを束にして配っていた女が、配り終えない束を抱えながらそう言っている。

あなたはタバコを消し、人たちのあとにつづく。Kの7、それがあなたの座席番号だ。K列の7番……あつた。6番と8番の間の席があなたを待っている。

「すいません」と言うあなたを、ヒザを折りその両足を片側に寄せて、通るためのスペースをあけてくれるK列の5番6番の人。

あなたは席についた。

場内はロビーとはまたちがったトーンのざわめきにつつまれている。

場内アナウンスが、携帯電話やポケットベルの電源を切るように促す。アナウンスが終わると、明るかった客席が暗くなってゆく。人たちのざわめきが急速にひいてゆく。やがて場内は暗闇になった。

あなたは軽く咳をコホンとして、腰をもぞもぞと動かし、すおりなおして、舞台上が明るくなるのを待ちうける。
そして実際、今、舞台が明るくなりはじめた。あなたはゆっくり、不要のチラシの束を椅子の下に置いた……。

純和風の二軒家と言っておこう。^{*1}
その居間には、和風の茶ダンス・机などが配されており、庭に面して縁側もある。庭は垣根で隣家とへだてられている。

1 12月15日 日曜日

まだ陽は残っているが、やがて夕刻という時間。
今、部屋には誰の姿も見えない。
やがて、夫の声が聞こえてくる。

夫の声 おーい。おかしいぞ。

何の反応もないので、

夫の声 おーい。

誰もいないその居間に、夫があらわれる。

夫 ……

夫は人捜すげで、居間から縁側と見わたすが、あきらめて、また隣りの部屋に引っ込む。

やがて、玄関の方から、妻が来る。

妻は、居間にあらわれ、手に持っていたハガキの束を机の上にポンと放り、しばらく立っているが、その机の脇にすわる。隣りの部屋から「ハッ、ハッ」という夫の声が聞こえるので、

妻 (そちらに向かい) いるの？

夫、出てくる。

妻 何してるの？

夫 テレビがおかしいんだよ。

妻 おかしいって？
夫 うつらない。
妻 え？
夫 突然、パッと消えた。
妻 アラ……。
夫 まだ寿命じゃないだろ。
妻 寿命なわけないでしょ。
夫 うん……。
妻 コンセントは？ ひっぱったりしなかった？
夫 なんてコンセントひっぱるんだよ。
妻 足でひっかけたりとか。
夫 何言ってるの……。

夫は、両方の部屋の間立っている。

夫 (机の上のハガキを見て) 何それ。
妻 年賀ハガキ。
夫 年賀ハガキ？
妻 野島さんがくれたのよ。余ったからって。うちじゃまだ買ってないって言ったら。
夫 へえ……。
妻 (ハガキをパラパラとはじきながら) これ……何だか中途半端な枚数……どうも屈辱的な感じがするのよ……こんなもんで「ありがとうございます」なんて頭さげたりして。
夫 うん、そりゃさげなきゃしようがないだろ。
妻 だからさげたわよ。
夫 何枚？
妻 さん、(と夫に差し出す)

夫、受け取って数える。²

夫 18枚だ……。
妻 まったく、どういうつもりなんだろう……。
夫 18枚ね……(と言いながら机の上にそれを置く)
妻 ……(つまらなそうにハガキを見ている)
夫 (ので) ……使わなきゃいいじゃないか。
妻 ……(夫を見るが返事しない)
夫 うーん……年賀ハガキね。
妻 何してたの？
夫 だからテレビが。
妻 今、なんか、力仕事してなかった？

夫 力仕事？

妻 ハッ、ハッって……。

夫 ああ……テレビの裏側みてたんだよ。

妻 ……。

夫 最近は、テレビの裏側もキレイになったな……昔はもつとゴチャゴチャしてたような気がしたけど……。

妻 松波さんに来てもらったら？

夫 うん。

妻 わからないんでしょ、原因。

夫 うん。

妻 電話一本で来るから。

夫 ……(笑う)……。

妻 つかないって……(立ちあがりながら) まったく？³

夫 ああ……裏から見ると、中の電気はついてるんだ。

妻、隣りの部屋に行く。

妻の声 ブラウン管てこと？

夫 そうなのかなあ。

妻の声 ブラウン管でしょう。

夫、妻の方を見ている。

夫 いつ買ったんだっけ、それ。

妻の声 まだ5年もたってないはずよ。

間。

夫 5年か……そうだな……。

妻、戻ってくる。

妻 消す時、ちょっと光るわね。

夫 ついたら、いきなりパッと画面が暗くなっただよ。

電話のそばで電話帳をめくり出す妻。

妻 松波、松波と……。

夫 いいよ、オレ、あとで言いに行くから。

妻 言いに行くって……直接？

夫 うん、ちゃんと事情説明して、アレしてもらうから。
妻 ……。
夫 ま、散歩がてら。
妻 そう？
夫 電話だと大げさになりそうだし。

妻は、ふーんとばかりに、電話のそばを離れる。⁴

妻 (自分で自分の肩をさわりながら) ……肩がこつてるのかな…。
夫 何？
妻 いや、肩が…。
夫 ああ…。(と言いながら、自分の肩をさわり) ……(まわりを見渡すようにして) 遅いな…。
妻 ……そうね。
夫 道に迷ってるんじゃないだろうな…。
妻 そう言えば、野島さん！ 聞く聞く！
夫 何を？
妻 何を…エレーナさんのことよ。
夫 (少し笑う)
妻 まあ、何だかんだと…どこ人だ、どういう関係なの、日本語はしゃべれるのか、あぐらはかけるのか…あげくの果てに、おたくは何だか面白いことがいっぱいあるわねって、こうよ。
夫 何だよ、いっばいって…。
妻 そう言うのよ。
夫 で、年賀ハガキ？
妻 え？ ……ああ。
夫 奥さんの方だろ？
妻 奥さんよ。
夫 ま、珍しいんだろ。
妻 また、私も正直にこたえたりしたもんだから。
夫 今度、エレーナさんと野島さんちの前を、フランス語でしゃべりながら歩いてみたらどうだ。
妻 (鼻で笑って) 留守だったらどうすんのよ、その時。
夫 留守か…それじゃ意味ないな。
妻 どうも清彦の情婦か何かだと思ってるわね、あれは。
夫 情婦…。(その表現を笑う)
妻 ま、いいけど。
夫 野島さんとも、ご主人が町議選におちてから、しばらく元気なかったけどな…。最近はまだいろいろやってるだろ、あの旦那。
妻 やってる、やってる。

夫 人間てのは、回復するもんだな……。
妻 雨後のたけのこって感じよ。^{*6}

庭に、紙風せんが舞い降りる。^{*7}

夫 (それを見て) 何だ？

庭を見るために、縁側まで出る夫。

夫 紙風せんだ。

妻 (そっちを見ていて) ……

夫、庭に降りていき、紙風せんを拾う。

そして垣根の向こう側を見る。

夫 どっから飛んできたんだ？

妻は、縁側まで来ている。

妻 放り返してやったら？

夫 どこに？

妻 向こうに。

夫 (紙風せんを見て) これ、なつかしいな……(妻のところまで来て) ホラ。

妻 (見るが) 誰かいらないの？ そっち側に。

夫 うん……。

妻 こどもでしょ。こんなもので遊ぶのは。

夫 そのこどもが……。 (いないんだよ)

妻、夫から紙風せんを受け取り、自分も庭に降りて、垣根の向こうを見る。

妻 きょうは、ホントにあったかいわ。

夫 ああ。

妻 変な陽気ね、もう12月だっていうのに。

夫 雨でも降るのかな……明日あたり。

妻 雨はイヤだわ。

夫 (紙風せんを) どっかの薬局でもらったものかな……くれるだろ、薬局で、こういうもの。

妻 (夫に紙風せんを返す)

夫 (受けとってにおいをかぐ) ……。

妻 何してるの？

夫 ん？ 薬のおいがしないかと思つてさ。
妻（垣根の向こうを見て）そこらに放つておけば誰か拾いに来るでしょ。
夫 あ……エレーナさんが帰つてきた。
妻（のぞいて） おかえりなさい！
夫（同じく） お疲れさまーっ！

垣根の向こう側に、小走りにエレーナがあらわれる。^{*8}

エレーナ 遅くなりました。
夫 道に迷つたんじゃないかかって話してたんですよ。
エレーナ 大丈夫です。
妻 あ、荷物、受け取りましようか。
エレーナ あ……ええっと……。
夫（妻に） 変だよ、そりゃ。
妻 何が？
夫 垣根の上から受け取るっていうんだろ？
妻 だって、重そうだから。
夫 ここまであげるのに、力があるじゃないか。
妻 だって……。
エレーナ それ、何ですか？
夫 あ、これ……これは紙風せん。
エレーナ 紙風せん……。
夫 さつき庭に……。
妻 こうやって話してるんなら、やっぱり受け取った方がいいでしょう？
夫 あ……。
妻（エレーナに） どうぞ。（と手を差しのべる）
エレーナ 玄関まで頑張りますから。
夫 あ、玄関まで……ハハハ……。

エレーナ、頭をさげて、玄関の方へ行くので見えなくなる。

夫 玄関まで頑張るか
妻 ……。
夫 肩はどう？
妻 肩？
夫 こつてるって言ったじゃないか。
妻 ……。（返事をしない）
夫（紙風せんを見て） そうだな……うん……誰か拾いに来るだろう。

そう言つて、垣根の向こうに放り投げる。

妻 あなた。
夫 え？
妻 私、妊娠してるかもしれないわ。
夫 え？
妻 まだ、わからないけど……。
夫 生理、来ない？
妻 だってもう、3週間ぐらい……。
夫 それ……。
妻 こんな遅れたことないもの。
夫 あ、そう……。
妻 (部屋に戻りながら) まだ、誰にも言わないでね。はっきりしないんだから。
夫 いやキミそりや……びよ、病院に行った方が……ちゃんと診てもらって……。
妻 どうもお疲れ様。⁹⁾

エレーナが入ってきたのだ。

手にスーパーの袋をさげて、袋も二袋くらいの大量の買い物だ。

エレーナ ただいま。
妻 重かったでしょう。
エレーナ 或る程度ね……ハイ、これ。
妻 (受け取って) わつ、重い。或る程度じゃないわよ、これ。
エレーナ 確かめて下さい。私、まちがって買ってきてないか。
夫 (部屋に戻ってきて、妻に) おろしなさいよ、或る程度以上重いものは。
妻 (夫に、袋を差し出して) これよ。
夫 (受け取って) あっ……こりや重い。
妻 (エレーナに) 混んでなかった？ あそこ。
エレーナ 人が多かったですね。
夫 あ、そりや混んでるってことだ。
妻 お茶でもいれましょうか。
エレーナ いいえ、どうぞおかまいなく。
妻 私たちも飲むし。
エレーナ あ……。
妻 あなたは？ 飲むでしょ？
夫 ああ……いやあ、しかし、こりや、たいした買い物でしたね。
エレーナ あ……(袋の中から、魚の切り身らしきものを取り出して) これはまちがって
ませんか？
夫 これは銀ダラの切り身……(妻に) これ、いいんだろ？ 銀ダラの切り身。
妻 (お茶をいれながら) 銀ダラの切り身……いいんですよ。
夫 (エレーナに) OK、OK、大丈夫ですよ。

エレーナ よかった……。

夫 フランスのスーパーとはちがいますか？

エレーナ そう……フランス語が通じませんね。

夫 あ、ハハハ……。

妻 そうだ、せんべいがあったわ……。

夫 (その妻の言葉がよくわからなかったので) え？…… (茶ダンスを捜している妻を見て) あ、せんべい……。

エレーナ ……。

夫 (あらたまったようにエレーナに) 一本とられたってわかりますか？

エレーナ 一本とられた。

夫 そう、一本とられた。

エレーナ 何か失敗したという表現ですか。

夫 失敗……ちよつとちがうな……正確を期すために、広辞苑で調べて……

夫、隣の部屋に広辞苑をとりに行く

エレーナ (なにげなく妻の方を見て) 一本とられた……。

妻 ……(ちよつと苦笑い) ……これ、せんべい。

せんべい、そして、お茶を出す。

妻 日本人で変でしょう？

エレーナ どうしてですか。

妻 (夫の方を見て) 変なことよろこんで……よろこんでるのよ、あれ。

エレーナも、そっちを見るが、どう反応していいかわからないようだ。

妻 あ、お茶。これも。おせんべい。

エレーナ あ、ハイ。

妻 ……。

エレーナ あったかいですね。

妻 そう……今日はね。

エレーナ 冬らしくない……。

妻 高気圧がはり出してるって言ってたわ……あ、テレビ。

エレーナ え？

妻 テレビがね、つかなくなっちゃったのよ。

エレーナ あのテレビですか？

妻 そう。

エレーナ ……。

妻 それでさつき、ちよつと……でも、夜は冷え込むんじゃないかしら……昼間あったか

いと、かえって夜は冷え込みが厳しかったりするから……。

夫が広辞苑を広げて出てくる。

夫 ありました、ありました……一本とられる……相手にやりこめられる……これでわかるかな……わかりますか、相手にやりこめられる。

エレーナ やりこめられる……。

妻 剣道とか柔道とか、そういうのからきてるんでしょう、一本ていうくらいだから。

夫 そうだな……だからつまり、フェンシングで、エイッ、決まった……その時の、そのやられた方の立場ですね。一本とられた！ そんな感じですよ。

妻 なにもフェンシングになおさなくなっちゃって……。

夫 でもまあ、わかりやすいだろ……念のため、やりこめられるを……（広辞苑のページをめくる）やりか……やりく……やりこ……あつた……。

妻 あなた、松波さんのとこ、電話しなくていい？

夫 松波さん？ ああ、いいよ、オレ、直接行くから……。

妻 早い方がいいでしょ。

夫 わかっている、わかっている……（広辞苑を読んで）やりこめる……論じつめて相手をだまらせる、言いこめる、言いふせる……うーん、かえってわかりにくいな……。

妻 ちよっとこれを台所の方に。

妻は、二つの袋を持って立つ。

夫 あ、オレ行こう。

妻 大丈夫よ。

妻、台所の方へ。

夫 ……。

エレーナ ……。

夫（エレーナに見られてると思い）いやいや……あ、これ。

年賀ハガキを茶ダンスの方へ。

そのまま、台所の方をちよっと気にして。

夫（照れたように）エレーナさんは、あれをスーパーからずっと持ってきたんだもんね……。

エレーナ ベンチにすわって、気づいたことをノートに書いたりしてました。

夫 え……ベンチって……。

エレーナ 途中の公園です。だから、少し休んだりしたんですね。

夫 へえ……気づいたことを……。

エレーナ 忘れないように……夢と同じ。現実には、時間がたつと忘れてしまいますね。
夫 なるほど……。

夫は、机の方に戻る。

エレーナ すすんでますか、仕事は。

夫 バロック・ロココ……17世紀あたりですね……冬休みの間に19世紀まではいきたいんですが。

エレーナ ……。

夫 オランダでレンブラント、スペインでベラスケス……その頃ですよ……フランスだと、ベルサイユ宮殿……ええ……。

エレーナ 歴史は、とても大切だと思います。

夫 そう……歴史……まあ、歴史ですね……学生も、印象派あたりになると、いくらか興味はもってくれるんですが……。

エレーナ あとで、仕事の部屋にお邪魔していいですか？

夫 (玄関の方を指して) あそこですか？

エレーナ ええ……。

夫 いや、それはいいですが……面白いのかなあ、あんなとこ。

エレーナ いろんな絵が見られるでしょう。

夫 ああ……変わった部屋でしょう。

エレーナ ドアのすき間からちよっと見ただけです。

夫 変わってるはずですよ……あそこはもとは診察室だったんです……女房の父親が医者をやっている……。^{*10}

エレーナ ええ、清彦さんから聞きました。

夫 ああ、清彦くんから……。

エレーナ 清彦さんは、医者がイヤで、親に反抗して青春をムダにしたって……

夫 ムダ？ ムダじゃないでしょう。立派な社会人になってるんだから。

夫、せんべいをかじる。

夫 フッフ……清彦くんのも、ああいう言い方する人だから……(こぼれたせんべいのくずをつまみながら) ……え……？ ノートって？

エレーナはポケットからペンをさした小さなノートを出して見せる。^{*11}

エレーナ これに……。

夫 あ……書くんだ、いろんなこと。

エレーナ そうですね。

夫 フランス語でしょ、もちろん。

エレーナ ええ。

夫 じゃあ、私が見てもわからないな。

エレーナ 自分でもわからない時があります。

夫 自分でも？

エレーナ どうしてそういうことを書いたのか……意味がつかめないことがあります。

夫 あとで読み返して。

エレーナ ええ、そう、あとで読み返して。

夫 へえ……あ、お茶どうぞ。

エレーナ ……(お茶は飲まず、ノートをめくっている)

夫 パリにも行ってないなあ……もう、10年……11年か……。

エレーナ 例えばこれ……嬉しそうに指輪を見ている……って書いてますけど。誰がいつ

どこで嬉しそうに指輪を見ていたのかわかりません……きっと私がどこかで見たはず

なんです……。

夫 ああ、そういうことを……へえ……。

エレーナ さっきは、木の葉がおちてきたと思ったら、それは小鳥だったって書いていま

す。

夫 作家なんだな、エレーナさんは。

妻が戻ってくる。

エレーナは、ノートをさりげなく閉じる。

妻 少し、気温がさがってない？

夫 気温？ そうか……。

妻 少し冷えてきたような気がするんだけど……。

夫 うーん……。 (外を見たりするが)

妻 (エレーナに) そうでもない？

エレーナ そういえば少し。

妻 ねえ。

夫 だいたいきょうは暖かいんだよな。^{*12}

妻 (エレーナのノートを見て) アラ、何それ。

エレーナ ええ……。

夫 あ、エレーナさん、ノートにいろんなこと書いてんだってさ。

妻 いろんなことって？

夫 だから気づいたこととか……。

エレーナ 忘れないようにです。

夫 見た風景とか。

妻 アラ……何かこわいわね。

夫 どうしてこわいんだよ。

妻 私たちのことだって……(エレーナに) ねえ。

エレーナ (少し笑いながら) それはないです……。^{*13}

夫 そこ閉めるか(庭に向かう障子を)……閉めよう。

夫、立って、障子を閉める。

妻 あ、そうだ。

妻が立って台所の方に。

夫 何？

妻 ちよっと。

妻、台所へ行く。

夫 何だ……？

エレーナ ……。

夫 (言うことがなくて) 日本の主婦ですよ……。

エレーナ そういえば、さっきの……(紙風せんを手で表そうとして) ……あれは、何でしたか？

夫 さっきの？

エレーナ 庭で……風せん

夫 ああ、紙の……紙風せんね……あれは返しました……って言うか、誰か拾いに来ると思っ、道の方に……。

エレーナ ……。

夫 ちよっとなつかしいものなんですがね……ま、こどもの遊び道具ってとこかな……ポン、ポン、こう、はねあげて遊ぶものです……最近、あんまり見かけないな……アレ？ なんて放っちゃったんだろう。誰もいないのに。

エレーナ 私もなつかしいと思いました。

夫 あるんですか、フランスにも。

エレーナ きっと、色のせいだと思います。赤、緑、ああいう色が、こどもの頃、まわりにあったような気がします。

夫 色か……。

エレーナ はっきりしてる色？

夫 わかります、原色ですね、混じり合っていない色……。

妻が出てくる。手に、かまぼこを持って。

夫 え？ 何？

妻 これね……ホラ(とかまぼこを見せる) ……賞味期限が。

夫 あ、ホントだ……。

エレーナ まちがいましたか？

夫 いえいえ。賞味期限のがありましたね……(妻に) 今日、何日だっけ？

妻 15よ。

夫 大丈夫だろ。二日ぐらい。

エレーナ (わかつて) OH! 古いもの! 何日までですか?

夫 二日、すぎてるんですよ。

エレーナ 私、かえてきます!

夫 いえいえ、そういうことじゃなくて……ひどいな、あそこのスーパーも。

妻 あなた、行ってきてよ。

夫 うん……でも、二日か……大丈夫じゃないかな。

妻 でも、あるわけでしょ、新しいのも。(エレーナに) 古いのをね、手前の方に置いておくんですよ。お客がね、先に、そっちをつかむように……だから、私なんかはいつも、奥の方から取るようにしてるの。

エレーナ 私、行ってきます。

妻 ううん、いいのよ。(夫に) あなた。

夫 うん。じゃあ、行ってくるか。

エレーナ ホントに私が。

夫 大丈夫ですよ。ここはちゃんと流暢な日本語で、わからせてあげないといけませんから。上着とって。

妻、夫の上着をとりに行く。

エレーナ ……。

夫 エレーナさんは気にしないで下さい。これは日本国民としての問題ですから……(隣の部屋に) ジャンパーでいいよ! ……かまほこか……!

この時、玄関で。

男の声 ごめん下さーい?

夫 え?

妻がジャンパーを持って隣の部屋から出てくる。

妻 誰?

夫 誰だろう。

妻、玄関の方へ行く。

夫は、ジャンパーを着る。ポケットに入れると、前に着た時のゴミのようなティッシュなどが入っているの。何だこれは」などとひとりごとを言いながら、ゴミ箱に捨てたりして、^{*14}

夫 そっか……帰りに松波さんここに寄ってくればいいんだ……

エレーナ ええ？
夫 いえいえ。

妻が、戻ってくる。

夫 帰りに松波さんここに寄ってくるよ。

妻 野島さんが。

夫 え？

妻 御主人にとって。

夫 オレに？

妻 ええ。

夫 野島さんの御主人？

妻 そう……さっきのホラ、回覧板のことで。

夫 出ろって言うの？ 集会に。

妻 じゃないのかしら。

夫 まいったな……。

妻 ちよっと顔出してよ。

夫 かまぼこは？

妻 (夫の手からとる) ……。

夫 何だよ……。^{*15}

かまぼこを置き、ジャンパーを脱ぐ夫。

夫 さっきはいなかったの？ 回覧板持ってた時は。

妻 御主人？

夫 うん。

妻 どうかなのかしら、私、玄関で話しただけだから。

夫 いなかったんだらうな……。

妻 早く出てよ。

夫 わかっているよ。

夫、ほぞをかためて、玄関の方へ。

エレーナ ……。

妻 近所の人なのよ。

エレーナ (かまぼこを持って) ……。

妻 大丈夫、すぐ終わるから。(とかまぼこをエレーナの手から取る)

エレーナ すみませんでした。

妻 ノット、アット、オールよ。ん？ これは英語か……フフフ……。

エレーナ ……。

妻 清彦まだかしらねえ。

エレーナ ええ。

妻 車は、ヨリユさんのところに返してくるのかしら。

エレーナ そうだと思います。

妻 そう……。

エレーナ ……。

妻 めったにないのよ、警察が見回ったりとか……。

間。

妻 またこんな風に脱ぎ捨てちゃって……

夫の脱いだジャンパーを部屋の隅に置きがてら、ちよつと玄関の方を気にする。

エレーナ、せんべいを食べる。

妻 知ってる？¹⁶ せんべいを食べる時ね。耳をふさいで食べると、とつてもうるさいの、自分の食べる音が……こう(と自分の耳をふさいでみせる)。

エレーナ、やってみる。

そしてバリバリやりながら、笑う。

妻 ね。

エレーナ 水の中にいるみたい。

妻 水の中？ そうだったかしら……どれどれ(と自分でもせんべいをとって試してみる)……うん、水の中、そうね。

エレーナ ……。(笑う)

妻 ……。(笑う)

夫、戻ってきて。

夫 ちよつと……お茶出して。

妻 お茶？ 野島さんに？

夫 あたりまえだよ。

妻 玄関に？

夫 玄関？ ……ま、玄関だよ。

夫、玄関の方へ行く。

妻、お茶をいれる。

妻 ……ながくなるのかしら……。

夫、すぐ戻って、

夫 あ、灰皿も……いやいや、オレが持っていく。
妻 ながくなるの？
夫 どうだか。

夫、灰皿を持っていく。
続いて、妻がくれたお茶を盆にのせて玄関の方へ。

エレーナ ……

お茶を飲むエレーナ。
立って、庭を見ようと、閉められた障子を開けに行く。
と、玄関の方から、清彦が入ってくる。^{*17}

エレーナ ……清彦……。^{*18}

清彦 (玄関の方を見て) 押し売りかと思ったよ、あんなところで……。

エレーナ お客様……近所の人だって。

清彦 わかっている、わかっている、野島さんというんだ……。

エレーナ 何か、まずいこと？

清彦 (首をかしげる) ……。

エレーナ ……。

清彦 いやあ、疲れた！ これ、誰の？

エレーナ 私の。

清彦、エレーナのお茶を飲む。

エレーナ もっと遅くなると思った。

清彦 オレ？ うん、そのまま車で来たから。

エレーナ どうだったの、警察は。

清彦 どうってことないよ。

エレーナ おこられた？

清彦 うん……あれ、密告だろうな……ここんとこ毎日、あそこに停めてたから。

エレーナ みっこく？

清彦 delation ……。

エレーナ AH……。

清彦 (机の上のかまぼこを) 何、これ。

エレーナ それ……私の不注意で……。^{*19}

清彦 不注意？

エレーナ 私、スーパーマーケットに買物に行ったのよ、清彦が警察に行ってる間。
清彦 へえ……。

エレーナ 日本の生活をね、ちょっと日本人になったつもりで……。

清彦 何それ。

エレーナ つまり、いつもこんなことをしている、そんな顔で、こう、買物カゴに、入れて歩きたかったのよ、いろんな物を。

清彦 くだらねえ。

エレーナ 清彦、私を感じたいのは、生活のフィーリングなの。今私がいる、この日本の生活の。

清彦 そんなことするから嫌われるんだよ。

エレーナ 嫌われる？ 誰に？

清彦 誰だか知らないけど。

エレーナ どういうこと？

清彦 生活のフィーリングなんて、そんなこと言ったら……ほとんど、バカにされるぞ、……ま、いいけど。

エレーナ 変ですか、私の言ってること。

清彦 いいよ、いいよ。で、何？ 不注意って。

エレーナ ……。

清彦 あ、これか……賞味期限……(つまらなさそうに) 何だよ……。

エレーナ いいよ、いいよって、あなたの悪いクセです、清彦、そのことに気づいてますか？

清彦 あ？ いいよいいよ？

エレーナ そうです、気づいてますか？

清彦 いいよいいよね……。

エレーナ 気づいてますか？

真剣なエレーナをからかうように笑ってそのおデコに人差し指を立てて、

清彦 こいつう……ハハハ……。

エレーナ ……。

奥の廊下を玄関の方から台所の方へ横切ってゆく妻。

つづいて、夫が片手にタバコを持ってゆっくりあらわれる。

夫 ……。

清彦 どうも、どうも。

夫 あ、清彦くん……。

清彦 押し売りかと思いましたよ。

夫 やっと帰った……。

清彦 何なんですか。

夫 ん？ いや……。

清彦 野島さんでしょ？

夫 そう、野島さん。

妻が入ってくる。

妻 あれ、結局、何しに来たの？

夫 だから、出ろって言うんだろ、集会に。

清彦 集会って何ですか？

夫 それがはっきりしないんだよ。

妻 あなたがもうちよっと意見らしいことを言えば、むこうだって言い方変わってくるんじゃないの？ よくわかりませんねえ、さあどうですかね、はっきりだから。

夫 だって、そうしか言いようがないじゃないか。

妻 そんなところで正直になったって……。

夫 正直って……そういう問題じゃないだろ。

清彦 (笑って) オレは学者だア！ って言っつてやりやよかったんですよ。

妻 何になるのよ、そんなこと言っつて。

清彦 人間にはね、タイプってものがあるんですよ。ああやって、集まって騒いで生き甲斐感じる奴と、一人でコツコツやって嬉しい奴と。

妻 人里離れた山の中で暮らしてんじゃないからって言われたらどうすんのよ。

清彦 そりゃ問題がちがうよ、社会の中で、一人コツコツやるから意味があるんじゃない。

山ん中って、そりゃ一人コツコツやるしかないでしょ。

妻 (閉まつてるはずの障子が開いてるので) アラ……(清彦に) あんた、開けた？

清彦 え？

妻 さっき、閉めたのに。

閉めに行く妻。

エレーナ (庭の花を) あれは何ですか？

妻 え？

エレーナ あの赤い花。

妻 あれは、ポインセチアって花よ。²⁰

エレーナ ポインセチア……かわいい花ですね。

妻 そう……いいかしら、閉めて。

夫 だけど、あれで、なまじ意見なんて言ったら、かえってめんどうなことになるんじゃないの？

妻 ま、程度ってものがあるだろうけど……。(と言いながら閉める)

夫 例えはオレにしてみれば、その集会とかいって、みんな集まつて、あっちもこっちも

まじめな顔してるのが耐えられないしね……でも、そういうことは言えないだろ？

妻 ま、いいですよ……。

夫 いいって……。

清彦 (夫の持つているタバコを見て) あれ、義兄さん、タバコ喫いましたっけ？

夫 え、いや、これは、野島さんが忘れてったの……(清彦に) 喫う？

清彦 マイルドセブン……ダメだな、ボクは。

夫 とりに来るかな……(妻に) これ。

妻、受け取って、棚のハガキの上に置く。

夫 (かまぼこを見て) そうだよ、スーパーに行こうとしてたんだよ……。

妻 清彦、あんた、どうだったの。警察の方は。

清彦 どうって？

妻 大丈夫だったの？

夫 おう、どうだった？

清彦 点数けずられただけですよ。

妻 車は？ 返してきたの？

清彦 そのまま乗ってきちゃった。

妻 そのまま？ で、どこに停めてるの？

清彦 うん、今までどおり。

妻 あんたそれ……。

夫 額田さんちの前？

清彦 ええ。

夫 うちの前まで持ってきた方がいいんじゃないかな。

清彦 空いてるでしょ、あそこ。

夫 ……。

清彦 明日にでも返しに行きますから、大丈夫ですよ。

妻 知らないわよ。

夫 (脱いだはずのジャンパーを) アレ？ ……お、ここか……(とって) オレ、ちょっと出かけてくるわ。^{*21}

清彦 そういえば姉さん。

妻 え？

清彦 おめでたなんだって？^{*22}

妻 え？ 誰に聞いたの？

夫 ……。

清彦 警察で、安藤先生に会って。

妻 ……。

清彦 え？ ちがうの？ オレ、およろこびでしようなんて言われちゃったよ。結婚10年目でやりましたねって。

夫 いや、それは……まだ内緒にしてただけど……。

清彦 え、どうしてですか。来年の8月だって？

夫 え、何が？

清彦 予定日ですよ。
夫 あ、予定日ね。

妻、台所の方に引っ込む。

夫 ……。

清彦 どうしたんですか？

夫 いや、ホントに内緒にしてたから……。安藤先生って、産婦人科だっけ？

清彦 ええ、うちの親父と、安藤先生、友だちだったから……。ボクがフランスにいるって
ことも知ってましたね……。いつ帰ってきたのなんて言われちゃって……。

夫 ……。

清彦 (エレーナに) *Ma soeur est enceinte* (姉さん、こどもが出来たんだよ)

エレーナ *J'ai comprise* (わかるわ)

清彦 *Après dix ans de mariage!* (しかも、結婚10年目で)

エレーナ (夫に) おめでどう(ぎ)います。

夫 あ……。

夫は、不条理にも、そこに出したままの広辞苑を片づけようとする。

夫 ん？ どうして、その安藤先生が警察にいたの？

清彦 (考えて) ……あ、そか……。なんでいたんだろう……。別に悪いことした風でもなか
ったですけどね……。

夫 ……。

清彦 え？ 別にボク、まずいこと言ったわけじゃないでしょう？

夫 いやいや。

清彦 流産か何かしたのかなって思っちゃった……。

夫 清彦くん、車……。

清彦 え？

夫 いいか……。いや、あの額田さんちの前が……。

清彦 持ってきますか、うちの前まで。

夫 でも、明日、返しに行くって言ったっけ？

清彦 ええ。

夫 じゃあ、いいか……。あ、じゃあ、明日ヨリコさんに会うんだ。

清彦 そう……。取りに来てくれるといいんですけどね。

夫 まさか、そんな……。

清彦 (エレーナに) おう、明日、一緒に行く？ 八王子まで。^{*23}

エレーナ どうして？

清彦 どうしてって……。いやなら、いいけど。

エレーナ 私は何をするのそこで。

清彦 え？

エレーナ 私は何をやるの、あなたの奥さんに会って。
清彦 奥さんで……あのね、ボクは独身なの……わかる？

夫は持っていた広辞苑をそこらに置いて、台所の方へ行く。

清彦 (夫を見送って) ……何だ……？

エレーナ あなたは不思議な人ですね清彦。パリにいる時より、もっとも不思議な人になっていくわ。

清彦 不思議……オレが？

エレーナ 理由がないことをよるこんでいる……あなたが奥さんと別れたというのも理由のないことに思える。理由がないからあなたはよるこんでいる。私をヨリコのところに入れていこうとする。これも理由はない、そしてそれがあなたは嬉しい……日本にいるあなたは、あなたのよるこぶことをいっばい見つけられて、それで、いっばいよるこんでいるような気がする……

清彦 パリにいる時は理由があったかい？

エレーナ そうね、あったと思うわ……少なくとも、そんな笑い方はしなかった……歩く、考える、電話する、話す、否定する、見る、笑う、書く、つかむ、差し出す、抗議する……私には理解出来た……あなたの人生の全部の理由がそこにある……あった……でも日本では……

清彦 ちょっと待てよ……ちょっと待てよ……オレはキミに親切をしてるんだよ……わかる？ 親切。senii ……理由は、キミが日本でやりたいことを出来るように……言っとくけどね。ボクはキミに理解されるために存在してるんじゃないの……オレに言わせればね、不思議なのはキミの方。

エレーナ 私が不思議？

清彦 キミのその頭の中で、どんな風に、理解出来ることと、理解出来ないことが区分けされてるのか、不思議だよ……そりゃ、少しはちがうだろうさ。パリにいるオレと東京にいるオレ。何しろパリじゃ日本語は通じないからな。

エレーナ じゃあ、教えて、私はなぜ、ヨリコに会いに行くの？

清彦 おい！ いやならいいって言ってるじゃないか。

エレーナ ……。

清彦 車で八王子まで行きや楽しいだろ。いろんな景色も見れるし、キミの大好きな日本の景色が。ちよっと着替えるわ。

清彦、隣りの部屋に行く。

エレーナ ……。

隣りの部屋で清彦が着替えてる気配。

清彦の声 きょうは暑いな……何だか……アレ？ おかしいな……テレビがつかないぞ

……ん？ つかない……。

エレーナは、隣りの部屋の近くに行き

エレーナ 清彦……一本とられたって、どういう時につかいますか？
清彦の声 え？

エレーナ ……。
清彦の声 何じゃそりや。

夫が台所の方から出てきて、そのエレーナを見ている。^{*24}

夫 ……。

やっと陽は傾きはじめた。

暗転――

2 12月20日 金曜日

庭に向かう縁側に椅子を置き、それにすわって庭の方を見ている妻。
夜である。

清彦が奥の廊下にあられる。

清彦 あれ？

妻 あ……。

清彦 義兄さんは？

妻 部屋でしょう。

清彦 書斎？

妻 ……

清彦 そうか……気づかなかったな……。

妻 エレーナさんは？

清彦 え……いや……。

妻 一緒じゃなかったの？

清彦 ううん。

妻 ……。

清彦 寒くないの？

妻 そうね……。

清彦、卓の前にすわる。妻は、そのまま。

清彦 ふーっ……!!

妻 きょうは終業式だったのね。

清彦 え？

妻 小学校。

清彦 ああ……。

妻 昼間は、ずいぶん騒がしかった。

清彦 冬休みか……。

妻 ……。

清彦 でも、小学校もずいぶん変わったな。あれで公立だっというんだから。まるでスポ

ーツジムじゃない。

妻 反対した人たちがいたのよ。

清彦 そりゃいるでしょ、とりあえず税金なんだから。

妻 賛成の人もいたし。

清彦 (笑って) 何を……。

妻、ガラス戸を閉める。

妻 ホテルに戻ったのかしら、エレーナさん。

清彦 どうかな……。

妻 あんた、もうちょっと優しく出来ないの？

清彦 何？

妻 エレーナさんによ。

清彦 何それ。

妻 ヨリユさんだって、あきれてたわよ。

清彦 ……。

妻 エレーナさん連れてっておいて、途中で帰れって言ったんですって？

清彦 どうなってるの、そこらへんの連絡網。

妻 電話一本でしょ、そんなもの。

清彦 電話ね……ま、いいでしょ。

妻 ……。

清彦 (思い出したように) ああバカ、よろこんじゃって。^{*25}

間

妻 誰のことよ。

清彦 ヨリユ、ヨリユ。

妻 よろこぶって、何を？

清彦 妊娠。

妻 ……。

清彦 それもさ、うち、ベビー服とかとってあるでしょ。おさがりを……あれがいいだの、

これがいいだの……言っていなかった？　そういうこと。
妻 ……。

清彦 あれ、来るよ、こども生まれたら、八王子から車とばして。

妻 あんた、ミリカちゃんには会ったの？

清彦 会ったよ。

妻 いくつ？　5歳になった？

清彦 なってる、なってる。

妻 わかるの？　父親だって。

清彦 わかりますよ、パパ、パパって、かわいいもんだよ。

妻 ……。

清彦 うーん……オレも、おじさんになるわけか……でも8月、日本にいるかな……。

(と言いながら、電話帳をめくっている)

妻 (ので) 誰に電話するの？

清彦 え？　いやいや……。 (離す)

妻 ……。

清彦 (テレビの方を見て) あれ…… テレビはなおったの？

妻 まだ。

清彦 何だ……。

妻 あんた、どうするつもりなの、エレーナさんを。

清彦 あ？

妻 好きなんでしょ、あんたのことが。

清彦 え？　知らないよ、そんなこと。

妻 好きだからでしょ、誘えばこうして遊びに来るってことは。

清彦 他に知り合いがないからでしょ？

妻 あの人、帰らないの？　年末年始は。

清彦 どこに？

妻 パリだかフランスだか

清彦 帰るんじゃないの？

妻 ……。

清彦 だから、一度帰って……で、来年の春から、駒場の方に。

妻 見つけたの？　下宿先は。

清彦 ま、捜してるけどね。

間。

清彦 10、11、12……オレももう3カ月もお世話になってるな……。

妻 ……。

清彦 義兄さんてき、いくつだっけ？

妻 年齢？

清彦 うん。

妻 どうしてよ。

清彦 別に。いくつだったかなと思って。

妻 42よ。

清彦 ふーん……。

妻 ……。

清彦 楽しみだな……女の子かな……。*26

妻がお茶をいれようとするので、

清彦 あ、オレ、いらないよ。

妻 何言ってるの、私が飲むのよ。

清彦 あ、そ。

妻 ……。

清彦 10年目でしょ？ あるんだなあ……なんか、そういう……

妻 (お茶が) あっつ……。

清彦 (何だと思姉を見る) ……。

妻 ちよつとそのティッシュとって。

清彦 あ……。

ティッシュの箱をとって姉に渡す。受けとって口のあたりをふく妻。

清彦 ……。

妻 何よ。

清彦 え？

妻 何か言おうとしたんじゃないの？

清彦 ……。

妻 え？

清彦 忘れちゃった……。

ここにエレーナが玄関の方から出てくる。

清彦 あれ？ どこにいたの？

エレーナ お義兄さんの書斎。

清彦 お義兄さんて……。

妻 ん？ じゃあ、うちの人も？

エレーナ ええ。

妻 やけに静かだったわね。

エレーナ 絵を見ました。

妻 絵？

エレーナ お義兄さんのかいた絵です。

清彦 おい、お義兄さんての、やめてくれない？

エレーナ ダメですか？

清彦 ダメっていうより、変だよ。

エレーナ どういう言い方がありますか、他に。

清彦 ムシュー・タジマとかさ……プチピカソとかさ。

妻 うちの人は？

エレーナ あちらに。(と書斎の方を指さす)

清彦 さて！

妻 何よ

立ちあがる清彦

清彦 ひっこみます。

妻 あんた、エレーナさんをホテルまで送っていくべきでしょ？

清彦 べき……べきね……べきべきと……。

妻 (エレーナに)……私が、額田さんちに行ってる間に、あなた帰ってしまったのかと
思ったのよ……あれ？ 靴もなかったわよ、玄関に。

エレーナ 靴……AH……。

エレーナは、庭に降りたところにある自分の靴を、とりに行く。

*27

エレーナ 庭をさつき……。

夫が出てくる。

夫 あ……二人とも戻ってたんだ……あったかいな、こっちの部屋は。

妻 何してたの？

夫 年賀状書いてた。

清彦 じゃあ、オレ、ホテルまで送っていいこうか。

妻 何も今送れって言ったわけじゃないわよ。

清彦 でも、そろそろ帰るだろ。

エレーナ 帰ります。

夫 こたつ入れるか。

隣りの部屋に行く夫。

夫の声 エレーナさん、こたつにもあたってみたいでしょ、日本のこたつというものに。

三人、夫の方を見ている。

夫の声 別にホテルに門限があるわけでもなし……そういえば松波さん！ どうなってるんだ？

夫、出てきて、

夫 エレーナさん、こたつ、こたつ。

エレーナ ……。

夫 (妻に) 松波さん、どうなってるの？

妻 明日、来るって。

夫 明日？ 今日の話？

妻 あれは……今日よ。

夫 (ため息まじりに) あれは今日か……。*28

夫は、テレビの見えるところまで来て、

夫 ま、しょうがない……。

間。

妻 私だけよ、すわってるの……。

皆、笑っていいのか悪いのか……。

夫 エレーナさん、靴(エレーナが靴を片方ずつ持っているの)それ、火の用心するみたいで、変。

エレーナ ヒノヨウジン……。

夫、エレーナの靴をとって、玄関の方に持って行ってあげようとして、

夫 (振りかえり) 靴、靴、火の用心、ハハハ……。

夫、玄関の方へ行く。

妻 (清彦に) すわんなさいよ。

清彦 ん？ うん……。

妻 エレーナさんも……まだ、いいでしょ。

エレーナ、遠慮するような。

夫、戻ってきて、

夫 エレーナさん、こたつ！ うるさいね私も。こたつこたつって、ハハハ……。*29

清彦 (エレーナに) え、何？ 絵を見てたつて？

エレーナ そうです。

夫 なんか無理矢理見られたって感じだったな……しかしエレーナさん、よく知ってたね。
ジョルジオ・デ・キリコなんて。

エレーナ ちょっとシュールレアリスムで、私、好きです、あとルネ・マグリットとか。

夫 あ、私の絵じゃなくてね。

エレーナ あ……私、どうしましょ。

夫 いやいや……あ、こたつってのもけっこうシュールレアリスムなのよ。

エレーナ ん？ それは……？

夫 家の中にもうひとつ家があるみたいで。

エレーナ AH……。

夫 てなこと言ってるうちに、いい温度になったりして。

夫、また隣りの部屋に入ってゆく。

エレーナと清彦は、のらりくらりとすわる。

夫の声 でも、静かだったね。

三人とも、何のことかわからなくて。

夫の声 さっき、さっき。私とエレーナさんが書斎にいる時。二人、この部屋にいたんじ

やない？

妻 いたわよ。

夫の声 そう。

清彦 義兄さん。

夫の声 え？

清彦 お酒か何か出しましょうか。

夫の声 お酒……。

清彦、立って台所の方に行こうとすると、妻が、それを制して台所に立つ。

妻 いいわ、いいわ。

清彦 あ……。

間

清彦 きょうは12月……何日だっけ？

エレーナ 20……

清彦 20日か……やっぱり、日本はあったかいんだな……。

隣りの部屋から音楽が聞こえてくる。^{*30}

夫の声 (笑い声で) 何だこれ。ベートーベンのジャケットに坂本冬美が入ってる！

妻が台所から、ウイスキーのセットを持って入ってくる。

清彦 あ、オレ、やろう……義兄さん、水割りでもいいですか。

夫の返事が聞こえないので、清彦、勝手に作り始める。

妻 エレーナさん、下宿は見つかったの？

エレーナ いえ、まだ……。

妻 いいところが見つかるまで、うちにいらしていいのよ。

清彦 まだ来年のことだよ、そんなにあせって決めてどうするの。

妻 そんなこと言ったって、春が近くなれば、どんどん決まるわよ、日本の学生が出てくるもの、その時期。

夫が、隣りの部屋から出てきている。

夫 何？

妻 エレーナさんの下宿……。いいのが見つからなかったら、見つかるまで、うちにいればいって話をしたのよ。

夫 ……。

妻 (清彦に) あんた、どうせその時期はパリにいつてるんでしょ？

清彦 どうせってのは何だよ。

妻 どうせ、よ。

清彦 わかんないよまだ。

夫 ああ。

妻 いいでしょ、その方が。

夫 うん……。

清彦 あ、義兄さん、これ。

水割りを差し出す。

その前にすわる夫。

夫 何？ 私だけ？

清彦 え……じゃあ、オレももらうかな。

夫 エレーナさんは？

清彦 (エレーナに) のむ？

夫 入れなさいよ、形だけでもいいじゃない。

清彦 そうですか、じゃあ。

夫 うん……下宿ね。

妻 あなた、こたつ、入れてるの？

夫 え？ ああ……。

みな、何となく、そっちを見る。

清彦 (笑いながら顔をもどして) うん……シユールかもしれない……ま、たいした発明だよ、こたつも。

夫 いろいろってものがあつたからね、昔は。

清彦 ああ……。

夫 発明っていうより、進化とみるべきだろう。

清彦 なるほど……。

夫 エレーナさん、わかるかな、いのり。

エレーナ いのり？

夫 ちがうちがう、いろいろ。今、私がまちがえた？

清彦 ええ、確か……。

夫 いろいろだよ。い・ろ・り。

エレーナ いろいろ……。

清彦 ま、だんろですよね、むこう式に言えば。

夫 そうね……だんろ。

清彦 *cheninee*

エレーナ AH……。

夫 え？ 今、何て言った？

清彦 シュミネー……です。

夫 ホウ……。

妻 よいしょ！・

妻、立ちあがり、隣りの部屋へ。

夫 何？

妻 スイッチ、切っておくわ。

妻、入っていく。

清彦 ペチカ……ペチカつてもいい言葉ですね。

夫 え？

清彦 ロシア語かな。

夫 ああ、ペチカね……。

妻、戻ってくる。

夫 何も切るこたなかったのに……。

妻 え？

夫 そのうち……。

妻 ……。

エレーナ 清彦がいやがるのではないのでしょうか。私がこの家に住むことになったら。

清彦 え？ 下宿？

エレーナ ちがいますか？

清彦 うーん……。

エレーナ そうでしょうか？

清彦 そうでしょうか？ って、キミは何を言わんとしてるの？ え？ 何を？ ホントに私は困ってしまいますよ。この家はね、オレの家じゃないの。そのことはキミもわかっているわけでしょう？ ならばさ、キミの今のその言い方はさ、非常に不可解なものになってくるわけよ。わかる？ オレの家じゃないところにキミが住むことになってオレが嫌がる。これ、どういうこと？

夫 要するにアレだろ、その、エレーナさんの言うことは。清彦くんの、ま、その、紹介みたいなことになってくるから……要するに責任のことだろ、清彦くんにかかってくる……。

清彦 そうかな……。

夫 そうそう、いや、そういうことなら、私たちの方は全然……あ、こりゃ清彦くんに言うべきことか……全然その……別に清彦くんに押しつけられてのことじゃないわけだから……。

妻 そうよ。私たちは、エレーナさんのために言ってるのよ、あんたとは何の関係もないわ。

清彦 関係ないことないだろ。

妻 どうして？

清彦 現実問題として、オレの話だつて出るだろ。

妻 いいじゃない、出たって。

清彦 ……。

妻 いいでしょ、別に。

エレーナ いえ、私が――

清彦（エレーナに）黙ってるよ！

間。

夫（音楽を）止めるか……。

夫、隣りの部屋に行く。

音楽、止む。

妻 出て、何が悪いの？

清彦 (少し笑って) ま、いいか……。

妻 そうよ。あんたの話だつてするわよ、このエレーナさんと。エレーナさんの知らないあんたの話だつて、私がしてあげるわ、このエレーナさんに。いいことばかりじゃないわよきつと。だいたい私は、あんたがパリでどんな商売のやり方してるのかも知らないし……。

清彦 知らなくつたつていいだろ別に。

妻 そう、いいのよ、知らなくつたつて。でも、今年の夏すぎから日本に来て、こっちでも店を出すつて話がうまくいってないつてことぐらいはわかってるのよ、そしてそういうことにあんたが耐える力を持ってないつてこともね、いつまでいるの？ 日本に！ いつまでいるつもり?! この家に！

夫が戻っていて。

清彦 ……。(その夫を見て照れ笑い)

夫 ……。(反応に困って)

エレーナ 清彦がいやがるつて私が言ったのは、私自身の問題です。私のことを清彦は知っています、つまり、私の人間性のことです。私は……何て言うのか……とてもこわがるのです、いろんなことをこわがるのです、何かを前にした時、私はためらいます、自分とそのもの間に起こる予想出来ないことが、私はこわいのです。conservative……(清彦に) ほしゅてき？ (と確かめて) ……私のことをほしゅてきだと清彦は言います。例えば私は、パリにいる時、大学の研究室に誘われました。男の教授でした。その人も日本の文学を研究している人だったのです。私はためらいました。いろんなことが混乱しそうだったからです。私は清彦に相談しました。清彦は、その申し出を受けるべきだと言いました。でもその男の教授は、ミシマを研究してる人よ、と私は言いました。私は、ミシマではなく、カワバタ・タニザキのことを勉強したかったです。でも、清彦は、受けるべきだと言いました。

清彦 だから、それは……なんだか日本的な奴だなあ……その男の教授が、キミのことを好きだつたつてところに意味があるわけでしょう？ それ、ぬかしちゃダメだよ。

エレーナ ノン、ノン、ノン……それはわからないことです。

清彦 わからないつて……だつて、それしかないでしょう。その前にね、その例えばはね、自分を美化してるよ。

エレーナ びか……。

清彦 わかるでしょ、美化。要するに自分がもてた話じゃないか。

エレーナ ノン、ノン、ノン……。

清彦 ちょっと待って、言っとくけだね、姉さん、こどものころ、ノンちゃんと呼ばれてたんだよ。ノンちゃん、関係ないけど……義兄さん、おかわり、入れましようか。

夫 おかわり……あ、そ……いや、自分で大丈夫……。

妻 エレーナさんは、御両親は？

エレーナ 両親、元気です。
妻 パリ？

エレーナ はい、パリです……ただ、別々に暮らしてます。私がこどもの頃からです。私は父親と暮らしました……妹がいるのですが、妹の方が母と暮らしたのです。

妻 へえ……。

夫 ハア……。

清彦 (夫に) すいません……。

夫 え、何か？

清彦 いや、なんか……。

夫 え？

清彦 (悩んだように) うーん……考え込んだな……。

夫 え？

清彦 自分がこどもの頃から住んでた家だからアレだけど……考えてみれば、ここは義兄さんの家なんですよね。

夫 いや、そんな……。

エレーナ (清彦に) 私、そういうつもりで言ってません。

清彦 え？

エレーナ わからないことです、マクダウエル教授(フランス語)が、私のことを好きかどうか。

清彦 ま、いいじゃん。

エレーナ いいじゃんじゃありません。

清彦 いいじゃんじゃありませんじゃありません。

夫 (妻に) ちよつとティッシュユとって。

妻、ティッシュユの箱を渡す。

夫、テーブルをティッシュユで拭いて、^{*32}

夫 いや、ホント、うちの方だったら、ホントかまわないですよ、いい、その、下宿先が見つかるまで。

妻 あなた、年賀状は、書き終わったの？

夫 いや、まだ……指先が冷たくなってきたから、こっちに来たんだよ……。

妻 ……。

清彦 (夫に) どうも、オレね、女の子のような気がするんですよ。

夫 え？

清彦 こども、こども。

夫 あ……。

清彦 いくら何でもまだわからないでしょう？

夫 どうなんだろう……。

妻 ……。

清彦 ま、女の子の方がいいっていう、オレの願望なのかな……。

夫 どうして、女の子の方がいいの？^{*33}

清彦 うーん……なんとなく……。

夫 ……。

清彦 だいたいうちは女の子の家系のはずなんですよ、オレがまちがって男に生まれただけ……。

妻 ……。

清彦 でも、安藤先生もよろこんでたなあ。いやあ、めでたいめでたいって……オレの肩たたいてどうすんのって、ハハハ……。あれ？ 言ったっけ？ あれからまた安藤先生に会ったの……。

妻 え？

清彦 会ったんだよ。パチンコ屋の前で。オレ、歩いてたら、パチンコ屋から安藤先生が、真っ赤な顔して出てきたのにバツタリ。「どうしたんですか」って言ったら、「今、銀行に」って……ハハハ……。^{*34}

妻 (夫に) 何してんですか。

夫が、ウイスキーのビンを、急須に傾けていたのだ。ふたまでとって。

夫 (気づいて) あ……こっちか……。

自分のグラスに注ぐ。

妻 (清彦に) あんた、エレーナさんを、ちゃんとホテルまで送ってあげるのよ。

清彦 じゃあ、そろそろ、行くか……何時？(と隣りの部屋を見て) あ、もうこんな時間か……ちよっと上着とってくるわ。

清彦、玄関の方へ行く。

エレーナ どうもお邪魔しました。^{*35}

妻 いっでした？ パリに戻るの？

エレーナ クリスマスが終わったら。

妻 あ、そう。

夫 じゃあ、クリスマスにはまた遊びにいらっしやいよ。

エレーナ いいですか。

夫 どうぞどうぞ……今度『山の音』を読み返しておきますから。

エレーナ ええ。

妻 『山の音』って？

夫 川端康成だよ。

清彦 ああ……。

夫 忘れてるもんな……昔読んだものは。

清彦、戻ってくる。

清彦 いこか。

四人、玄関の方へ向かう。

誰もいなくなるそこ。

玄関の方から、かすかに笑い声が聞こえてくる。
やがて、妻と夫が戻ってくる。
*36

妻 わからないでしょう、火の用心なんて。

夫 うん……。

夫は、隣りの部屋の方へ、

妻は、庭に向かう縁側の方へ、用もないのに、それぞれに動く。

夫 アレ？

妻 何？

夫 これ、清彦くんの財布じゃないの？

妻 あ……。

夫 いいの？ 持ってかなくて。

妻 大丈夫でしょ。

夫 ……。

妻 必要だったら、取りに戻るんじゃないの？

夫 うん……。

妻がガラス戸を開けているので、

夫 何だよ。

妻 外気にあたりたいのよ。

夫 ……。

妻 やっと昨日あたりから冬らしくなってきたわ……。

夫、すわってウイスキーを飲む。

妻、ガラス戸を閉める。

妻 変わった人よ、あのエレーナさんて人も。

妻は、清彦の財布のところへ行って、中を開けてみる。
*37

夫 おい……。

妻は弟の財布を点検してから、そこに戻す。

夫 そんなこと……。

妻 あの子、お金かりてるわよきつと。

夫 かりてるって？

妻 エレーナさんに。

夫 清彦くんが？

妻 かりてるわよ。

夫 ……。

妻 だからと思って私、両親のこと聞いてみたのよ。

夫 え？

妻 だって、エレーナさん自身がお金持ってるわけないもの……。

夫 ……。 夫、清彦の財布を見、妻を見る。

夫 ……。

間。

夫 清彦くんてのはどうしてもてるんだらう……とりたてていい男でもないのに。

妻 (少し笑つて) 何それ……。

夫 だって、もてるだらう。

妻 知らないわよ。

夫 ……。

妻 私にも少し下さいよ。

夫 何を？

妻 お酒よ。

夫 お酒はおまえ……。

妻 (清彦のグラスに自分で注ぐ)

夫 ……。

妻 (少し飲んで) わっ……。 (とグラスから顔をさけるような仕草)

夫 水。うすめないと。

妻 もういいわ。

夫 ……。

妻 けっこうです……。

間。

妻 何か、怒ってる？

夫 その言い方はないだろ。

妻 そうか……。
夫 え？
妻 ごめんなさい……。
夫 ……。
妻 私、恥ずかしかったのよ……変だと思いかもしれないけど……。
夫 それは……。
妻 あんなにドキドキしたの、はじめて。
夫 え？
妻 安藤先生に診てもらった帰りよ……その日のうちにあなたに報告するつもりだったんだけど……あの日、野島さんがうちにいらっしやって……ああいうことしゃべってたでしょ？ 言い出しそびれて……それで何だか、またドキドキしてきて……。
夫 ドキドキ……？
妻 ドキドキなのよ、ホントに、悪いことを隠してるみたい……。
夫 なんて悪いことなんだよ。
妻 (照れたように笑い) ホントに、わからないの……あなたは？ 恥ずかしくない？
夫 え……この年で、こどもがってこと？
妻 ……。
夫 別にそんなこと……だって、やっと出来たんだから。
妻 ……。
夫 野島さんが来た日って……(考えて) ああ……あの日か……そうだったんだ。
妻 ……。
夫 いや、近所の人だって、そうは見ないよ。ああ10年目でやっと出来たんだって、とりあえず、そう思うよ、清彦くんだって言ってたじゃないか、安藤先生もよろこんでたって……。
妻 あなたも？ よろこんでくれる？
夫 そりゃ、よろこぶよ……。
妻 ……。
夫 よろこぶだろ、そりゃ。
妻 ……。
夫 もう、何か実感あるの？
妻 実感て？
夫 おなかにこどもがいることのことさ。
妻 別に、そんな……。
夫 ……。
妻 よくわからないし……。
夫 予定日とかは聞いたの？
妻 8月15日だって……。
夫 終戦記念日か……。
妻 え？
夫 いや、終戦記念日だろ。

妻 ああ……。
夫 あ、もう水がないな……。

ウイスキーを割る水を夫がとりに行こうとすると、

妻 ねえ。

夫 (立ちどまり)え？

妻 ……。

夫 何？

妻 私、変なのかな……。

夫 ……。

妻 妊娠したでしょ私……それはいいんだけど……(思い切ったように)だからね、今年の9月から弟がうちにいるでしょ？ そんなことなかったわけよね、結婚してからずっと……ずっと二人で暮らしてたわけだし……

夫 ああ……。

妻 だから……弟がね、同居するようになってから、結局10年出来なかったものがね、こういう形でね……。 (いいよどむ)

夫 ……。

妻 こんなこと考えるの、変かな…

夫 ……。

私、もっと自分の気持ちを整理してから言うつもりだったのに。清彦が安藤先生に聞いたって。ああいう風に知らされて……(ちよつと明るくしようとして)……私パニックだったわよ……こう……(言葉を搜して)……波をかぶったみたい……血が逆流するって言うの？

夫は水をとりに行かず、そこにすわる。

妻 だから、あたりまえのことがね、暴力みたいに、あたりまえじゃないことに、おそいかかってくるのよ。

夫 あたりまえじゃないって……。

妻 あたりまえじゃないんだもの、私が考えて……(言いなおして)感じてることは！

夫 あたりまえじゃないって……。

夫 そんなこと言ったら……そんなこと言ったら、人間の悩みなんてものはさ、だいたいにおいて、そういう表現しなきゃならなくなるよ……あたりまえじゃないって、それは……そういう風に考えることが、むしろ変だよ。

妻 じゃあ、あなたは……。

夫 オレが……何？

妻 (言いなおして)……あなたもホントウによるこんでくれる？

夫 何を？ こどものこと？ よろこぶよ……言ってるじゃないか、よろこんでるって

……。

妻は、急に口許を押さえて、泣く。

夫 偶然たる……何の意味もないよ……清彦くんが同居してることなんか……。

妻 やっぱり変だってことでしよう、私か感じてることは。

夫 ちがうよ、ちがうだろ。

妻 だって偶然じゃないって考えてるんだから、意味があるって考えてるんだから。

夫 いや、そりゃ、そう考えてしまうことは変だろうけど。オレが言ってるのは、そう考
えてしまわなくたっていいってことだから、実際、キミはそう考えてしまってるわけじ
ゃない。つまり、その可能性のことを思って、悩んでる……そういうことだろ？

……そのことは変じゃないよ……。

妻 ……。

夫 (明るくしようと少し笑いながら) ドキドキって……(そして) あ、オレ、水……ど
れ!(と立ちあがる)

妻 ……

夫、台所の方に引っ込む。

ひとりになった妻は、しばしポーツとしている。

やがて、立って、隣りの部屋へゆく。

そこに誰もいなくなる。

夫が水を持って戻ってくる。

一瞬「?」となるが、すぐに妻は、隣りの部屋にいたことがわかる。

夫 ……台所の方はやっぱり、冷えるな……あ、そか、お湯割りでもよかったんだな……
ま、いいか。

夫は、ひとりで水割りをつくる。

妻の声 あなた。

夫 (隣りの部屋を見て) え？

妻の声 こどもが生まれたら、新しい家に引っ越さない？

夫 え？

妻の声 この家売って。

夫 売って……。

妻の声 結婚して、1年と3ヵ月？ それだけなの、私が、この家以外で暮らしたのは。

夫 ……。

妻の声 小さなマンションだったけど……(少し笑って) 楽しかったわね……。

夫 ……。

妻の声 玄関を開けると、そこが高速道路で……フッフ……。

夫 まだあるよ、あのマンション。
妻の声 ホントに!!
夫 ああ……こないだ、あっちの方に行った時、見た……そのままだった……。
妻の声 そう……。
夫 出口から誰か出て来ないかと、しばらく見てた……。
妻の声 いっ?
夫 いっだったかな……今年だよ、夏……暑いさかりだった……。
妻の声 夏か……暑かったわね……。
夫 え?

妻の方を見ていた夫、水割りのグラスを片手に立ちあがり、隣の部屋の方へ行く。へりに立ち、妻の方を見ている。
と、妻が、隣の部屋から出てきて、ティッシュのところに行き、二、三枚抜きとって、鼻のあたりをふく。
夫は、立ったまま半回転させられた。

夫 ……。(妻を見ていて)
妻 (気持ちを整えるように) ……どうしたんだろう……。

^{*38} 夫が少し動くと、近くにあった清彦の財布が足にふれて、タタミの上におちる。

夫 (それを拾って) あ……清彦くんの財布……。

それをもとに戻す夫。

妻 何か言って。
夫 何かって……?
妻 何か。
夫 ……。
妻 出口から誰か出てこないか、ずっと見てた?
夫 ああ……マンションね。
妻 出てきたの、誰か?
夫 いや……午後の変な時間だったし……。それにずっと見てたわけでもなかった……。
妻 一階の入口に郵便受けがあったわよね。
夫 ああ……。
妻 私たちは? 303?
夫 303。そう303だった……。
妻 見なかったの? 郵便受けは?
夫 いや……。

妻 銀色の郵便受けだった……。

夫 ああ。

妻 帰ってくると毎日のぞいてた……階段をのぼりながら玄関にたどりつくまで差出人の名前を見たりして……あの部屋で、あなたは何枚も私の絵をかいた……。

夫 ……。

妻 ……。この家は大きすぎるわ

夫はグラスを卓の上に戻し立ちあがる。

夫 そんなことないだろ……。

そして、庭に向かって歩いてゆく。

ガラス戸を開け、庭に降りる。

妻 ……。

夫 大きすぎるってことはないよ……こどもにとっても、大きい家の方がいいだろうし

妻 ……う!! 寒い! 寒いな、さすがに。

夫 寒いわよ。

夫 上着持ってきて。

妻、隣りの部屋に上着をとりに行く。

すぐにカアディガンを持ってくる。

縁側から、それを渡す。

夫 (受け取って) ……フフフ……中に入れば問題ないのにな……。 (着る)

妻 ……。

夫 うん……だいたいや……。

夫は、冷えた体をあつたためるために、飛んだり走る真似をしたり。

夫 うーん……8月15日か……

妻 ……。

夫 こたつ入れといて。体が冷えきったらこたつに入るから。

妻 (こたつの方を見る)

夫 松波さんがテレビ直してくれないから外に出るしかないじゃないか……。

妻はこたつの方には行かず、そこにいる。

夫 ん? こたつ、こたつ。

妻は、じっとしているが、やがて、自分も庭に降りる。

夫（その妻に）寒いぞ。
妻 ……。

夫は、ガラス戸を閉める。^{*39}

夫 ……おかしいな、ここを閉めれば、少しはあったかくなるつもりだ……ハハ……あの赤いのは何だ？

妻 非常灯よ、小学校の。

夫 あったかそうだな……。

妻 気づいてる？

夫 え？

妻 私も寒いってこと。

夫 ……わかってる。

妻 ……。

夫（妻の手をとる）
妻 からだ。

夫は垣根の向こうをちよっと気にして、

夫 こっち……（と死角に妻の手をひっぱり）……理由が必要な……。

妻 妊婦なんだから。

夫 そうか……それでいいのか……おまけに、両方とも寒い。

夫が妻を抱き寄せようとする、

妻 両方って、私たちのこと？

夫 ……そうね。

妻 両方か……。

夫 ああ、両方だ。

夫はもう一度、垣根の向こうを気にして、少し移動し、妻を抱き寄せようとする。
と、いつの間にか、居間に清彦が戻っており、妻と目が合う。

妻（夫から離れ）何？ 財布？

清彦（聞こえず）え？

妻（夫に）聞こえないみたいだわ……ガラス戸で。

暗転

3 12月25日 水曜日

午前の光が射している。
隣の部屋からテレビの音。
今、その部屋には、ひとりの男(野島)がいて、時おり、そのテレビの音の方を
気にしている。

野島 (テレビに反応して) ハハハ……。

間

野島 ……そうすつと、いったん帰って……で、来年、また日本に。

エレーナの声 ハイ、そうですね。

野島 ハア……(うなずいて) ……(ひとりごとのように) ミカン一個もらお。

野島はカゴにのっているミカンを一個とり、皮をむきはじめる。

野島 私も、学生時代は、やれ大江だ、やれ高橋だって、読みましたがね……高橋和巳御
存知ですか？ (いいえとエレーナが反応したのだろう) ……そうですか…… 『悲
の器』…… 『我が心は石にあらざ』……奥さんが高橋たか子さんについて、この人
もやっぱり小説家なんですよ……そうそう、同じ頃、プロ野球の選手に高橋二三って
のがいて、字がちがうんですが。同じ高橋かすみだもんですから、これですいぶん混
乱したのもいたりして……そういう時代でした……あ、ミカン、どうですか？
エレーナの声 ……。

野島 ……ひとりで食うのもなんか……(外を見て) 今年は雪が降らないのかな……。

清彦がパジャマ姿で、玄関の方から出てくる。^{*40}

清彦 アラ？

野島 あ ……清彦くん。

清彦 なんだ、野島さんか……。

野島 野島です。

清彦 なんか軽薄な声の奴がいるなと思ったら……。

野島 おいおい。

清彦 どうしたんですか？

野島 ん？ いや……。

清彦 (エレーナの方に) 姉貴は？

野島 今、御主人をむかえに……。

テレビの音が消える。

清彦 義兄さんは、どこに行ってるんですか？

野島 どこって、私も……。

エレーナ (出てきて) 年賀ハガキを出しに……それから、来年のカレンダーを買ってくるって……。⁴¹

清彦 動くね、午前中から。

野島 ああ、そうだったんだ……私も、いろいろ詮索するのもアレかと思って……。

清彦 何もむかえに行くこたないと思いませんか？ こどもじゃないんだから。

野島 ああ……。

清彦 何時だ？(隣の部屋の時計を見て) ああ、もうこんな時間か……。

清彦は、朝刊を広げ読み出す。

野島 (言い訳するように) いや、私も、妙な具合で……彼女とふたり、あっちとこっち

で……ハハハ……。

エレーナ 清彦、お茶をいれますか。

清彦 お茶ね。

エレーナ いれますか。

清彦 おねがいます。

エレーナ、お茶をいれる。

野島 (その姿を見て) ホウ……。

清彦 (あくびをする)

野島 お、あくび、ハハハ……。

エレーナ (野島に) お茶、いれましょうか。

野島 私？ あ、こりゃ……光栄の至りです。

エレーナ ……。

野島 ま、すごく、嬉しいってことですね。

清彦 え？ 野島さん、何の用って言いましたっけ？

野島 用……用ですか……用は、今度町議に働きかける議題のことですね、ちょっと田島先生にも御協力いただきたいと思ってます。

清彦 何ですか。働きかける議題って。

野島 ま、いくつかあるんですが、一番大きいのは、合併の問題なんですよ。

清彦 合併？

野島 そう、隣の藤崎町の宮前からこっち、番地でいうと7丁目8丁目になるんですがこれをね、うちの方に合併しようって話でもう3年も前から持ちあがっている話なんですけど、いっこうに話が展開せずにすね、反対派の連中が役場の前ですわり込みな

んかやったもんだから町議会の方でも、二の足を踏んだりして……。

清彦 合併すると、何か得があるんですか？

野島 得？ 得って？

清彦 賛成も反対も損得の問題でしょう？

野島 いやいや、損得じゃなくて、下水道の問題、学区の問題、交通の問題。すべてをとってもその方がいいわけですよ、生活レベルで考えてですね……損得ってあなた。

(と清彦の肩を笑いながらたたく)^{*42}

清彦 ……。

エレーナが二人にお茶を出す。

野島 あ、どうも……いやあ、私も前回の選挙で敗北してから逆に、そういう、何て言う

んですか、政治に対する使命感って言うんですか。こう、湧きあがってきたみたいで

……(お茶を飲んで) あ。おいしいな……オーシャンゼリゼって感じですよハハハ

……。

清彦 (エレーナに) 何時ごろ、起きたの？

エレーナ うーん……8時くらいかな……。

清彦 飲みすぎたな、オレ。

エレーナ かなり、飲んでた。

清彦 すごいチャンポンだったしな。

野島 お酒？

清彦 ええ……ゆうべクリスマスやったもんだから。

野島 ああ……そうか……。

エレーナが、隣りの部屋へ。

清彦 何？

エレーナ ちょっと……。 (と入っていく)

野島 清彦くんより、背高い？

清彦 え？

野島 背……高いよね？

清彦 (エレーナに) やめろよ、そのノートに書きとめるの。

野島 ノートって？

清彦 え、いや……。

エレーナ、戻ってくる。

清彦 何書くわけ？

エレーナ 内緒。

清彦 ……。

エレーナ はだして町を歩く女って書いたのよ。

清彦 誰だってイヤだと思うぜ。なんか観察されてるみたいで……。

野島 ……。

清彦 え？ 何それ、はだして、何？

エレーナ 町を歩く女、急にそう思ったの……別に観察しやしないでしょう？

清彦 でもそれを確認するためには、いちいち聞かなきゃならないよ……(バカにしたように) 何だよ、はだして町を歩く女って。

エレーナ ……。

清彦 姉貴のことか？

エレーナ あねき？

清彦 姉さんのことだよ。

エレーナ ちがいます。

清彦 じゃあ誰なの、はだして町を歩いているのは!?

エレーナ 誰でもありません。

清彦 誰でもない？ 誰でもないわけないだろ。頭の中に思い浮かんだんだろ？ 誰かに決まってるじゃないか。そんなもの。

エレーナ ホントにただ思っただけです。

清彦 じゃあ、何？ それは、どういう姿なの、その女の、しあわせな姿!? それともふ

しあわせな姿？ はだして町を歩くってことはさ！

エレーナ ……。

清彦 Et alors, elle est comment ? (その女の、しあわせな姿!? それともふしあわ

せな姿!?) de marcher pieds dans ville! (はだして町を歩くってことはさ!)

エレーナ (日本語で) 光を見て、そう思っただけです！ この光を見て、はだして町を歩く女って、ただ思っただけです。

清彦 ……。

エレーナ 無意識の記憶のようなものです。

清彦 無意識の記憶？

エレーナ 私はそれで成り立っているはずですよ。私の知らない私で私は成り立っているはずですよ。私は集めます。私は拾います。散る？ 散ってしまった私を、私は拾ってあげるのです。

清彦 ……。

エレーナ 誰のことでもありません。私の中にあることです。

清彦 私の中？ 入り込むだろ、オレはキミの記憶の中に、この野島さんはキミの記憶の中に！ 入り込むんだよ。あんたの中に！ だから誰のことでもないなんて言えるわけないだろ！⁴³

野島は所在なく、お茶など飲んで。

清彦 顔も洗ってねえや。

清彦、立って洗面所へ。

エレーナ ……。

野島 うまいね、日本語。

エレーナ あなたは、清彦のことを知ってるんですか？

野島 知ってるって……こどもの頃だからね……といっても一緒に遊んだわけでもないし……お姉さんの方ならまだね……年がいくらか近いし……むしろ、ここのお父さんの方がよく知ってるよ。私よく聴診器あてられたから……これこれ。(と医者が聴診器をあてる姿)

エレーナ ……。

野島 お父さんは、清彦くんのこと、医者にしたかったらしいけどね……。

エレーナ (おもむろに自分のことを話す) 私は私の父を尊敬しています……私を育ててくれました……。(が、あとがつつかない)

野島 ……。(ミカンを食べようとするが)

エレーナ なぜ私がこうなのかということを私、時々考えます……つまり、私には何が足りなくて、何が多すぎるのか、ということですよ。(ミカンをどうぞ食べて下さい。)

野島 あ……。(食べる)

エレーナ ポーランドのワイトルド・ゴンブロビッチという作家は、ある小説の中で、こんなことを言っています。さかずきからこぼれおちる一滴の意味、それは……それは何だと思えますか？⁴⁴

野島 え？ さかずきからこぼれおちる一滴の意味……ああ……。

エレーナ それは、多すぎるってことだ。

野島 あ……そかそか……なるほど……。

エレーナ でも、私はそれは、足りないという意識だと思えます。その一滴をこぼれおちさせてしまうもの……それは足りないという意識……つまり、足りないという意識が多すぎるという結果を生んでしまうんです。

急に黙ってしまうエレーナ。

野島 ええっと……それは……。

エレーナ え？

野島 足りないという意識が……多すぎるといふ結果を生む……。

エレーナ そう……そうです……。

エレーナは、自分が誰に向かって、こんなことをしゃべってしまったのか……と
いう目で野島を見ている。

野島 白人とはよく言ったもんだ……色が白い……。

エレーナ ……。

野島、白人を前に、黄色人種が黄色いミカンを喰べちゃまずいな……ともぐいになっちゃ

う。ハハハ……いや、(ちそうさまでした……。

エレーナ ……。

野島 (玄関の方を見るようにして) 清彦くんは、洗面所かな……。

エレーナは立ちあがり、庭に向かう縁側の方へ行く。

野島 ……。

エレーナ C'est la nature de l'être humain doute (人間の営みにまちがいはない……)

L'histoire s'écoule toujours correctement (歴史はいつも正しく流れていく……)

^{*45}

野島 ……。

エレーナ (野島に) この庭はかわいいってことを言ったんですよ……。

野島 ホウ……。

玄関の方から妻があらわれる。

野島 あ、奥さん。

妻 (野島に頭をさげ、エレーナに) 清彦、今起きたの？

エレーナ ちよつと前に。

妻 そう……(野島に) ごめんなさい。見つからないの。

野島 いや……そうですか……。

妻 郵便局、文房具屋、一貫堂、カトレア、画材の十文字、そこらへんのぞいてみたんですけど……。

野島 申しわけありません。私の方が出直せばいいだけのことだったのに……ま、夕方に

でももう一度。きょうはいらっしゃるでしょう？

妻 ええ、いると思います。

野島 奥さんの方からもひとつ、明日のこと言っといて下さい。

妻 どういう風に……。

野島 どういう風にとって……集会に出席して下さいるようにですよ。

妻 あ……。

野島 じゃあ、何のためにいたのかもわからないけど……失礼します。

妻 おかまいも出来ませんで。

野島 充分充分。(エレーナの方を見て) いい経験させてもらいました。メルシ、メルシ。

ここに清彦戻り。

清彦 あれ、野島さん、お帰り。

野島 じゃあ、また。

清彦 どうも。

野島 うちの方にも顔を出して下さい。

清彦 ボクがですか？

野島 そんな、びっくりしたような顔で……御近所づきあいつて奴ですよ。
清彦 あ……

野島 じゃあ、奥さんも。
妻 ええ。

野島 いやいや、もうお見送りはせんといして下さい。

野島につづいて、妻も玄関の方へ。

エレーナはまだ縁側の方について。

清彦 野島さんか……。

エレーナ あの人の職業は何？

清彦 あの方は……何だったかな……。

エレーナ よく笑う人だわ。

清彦 え？ あ、そう……そうかな……。

間

エレーナ 空がきれいね。

清彦 ああ……ここんどこ、いい天気がつづくな……アレ？ 朝メシ食ったの？

エレーナ うん。

清彦 そう……(声を出して) あ、あ、あ……なんか声が変わだな……(ミカンを見て、
声練習のように) ミカン、ミカン……ミカンを食べる……食べる……。^{*46}

と言いながらミカンの皮をむきはじめる。

エレーナ 明日の今頃は、もう飛行機の中だわ……。

清彦 (少し反応する) ……。

エレーナ 変ね……帰りたいような、帰りたくないような……。

清彦 ……フフ……。

エレーナ あなたと逆になるかもしれないわね……私が日本に来る頃、あなたはパリに。

清彦 かもね。

エレーナ ……。(清彦を見ている)

清彦 (ので)……何？

エレーナ とむぐいって何ですか？

清彦 とむぐい？

エレーナ とむぐい……ちがう？

清彦 とむぐい……トムって人の食い方かな……木こりかなんかで、すごい食う人じゃな

いの？ トムって人が……なんで？

エレーナ とむぐい……(首をひねる)……ちがったかな……。

妻が戻ってくる。

妻 アラ……ミカン食べてんの……。

清彦 ん？ うん……。

妻 朝ごはんは？

清彦 朝って、もう昼じゃない。

妻 そうよ……昼ごはんではないの？

清彦 いいスよ……。

妻 エレーナさんなんて、朝ごはんの用意手伝ってくれたんだから。

エレーナ いえいえ……。

清彦 おう、やったね。

エレーナ みそ汁のつくり方を学びました。

清彦 そうそう、そういうのをノートに書くの、わかる？

エレーナ ……。

清彦 あ、そうだ、野島さんて何やってんだっけ？

妻 何って？

清彦 仕事、仕事。

妻 仕事してないのよ。ホラ、町議会議員におこったから。

清彦 あ、そう……。

妻 なんだか毎日、床屋に行ってるらしいわよ。

清彦 床屋？

妻 しゃべりによ、時々髪も切るらしいけど……。

清彦 へえ……。

夫が、顔を出す。^{*48}

夫 帰った？

妻 あなた。

夫 帰ったの？

妻 野島さん？ 帰ったわよ。

夫 あ、そ。

妻 どこにいたの？ 私、捜しに行ったのよ。

夫 知ってる、知ってる。

妻 え？ どこに？

夫 部屋にいたよ。

妻 部屋？ だって靴が……。

夫 いや、帰ったら、玄関に見なれない靴だろ……耳をすませばあの人の声じゃない……

靴持って、部屋に隠れてたんだよ。

妻 遅いと思ったのよ。

夫 悪い悪い……いやあ、部屋のドア開けられたらどうしようかと思って、ヒヤヒヤだっ

たよ。

妻 まったく……。

夫 あ、そうだ、カレンダー。

夫、また引っ込む。

妻 なんで隠れる必要があるの？

清彦 ……。

エレーナ ……。

清彦 姉さん、ちゃんと靴はいてたんでしょ？

妻 何？

清彦 町を歩くのにさ。

妻 何言ってるの。

清彦 いやいや、ハハハ……。

エレーナ ……。

夫が、買ったカレンダーと、年賀ハガキ18枚を持ってくる。

夫（ハガキを出して）これ、結局、つかわなかったから。

妻（受け取って）どうするの、これを。

夫 捨てるなり何なり。

妻 私が？

夫（受け取って）じゃあ、いいよ。

妻 ……。

夫（カレンダーの方を）ええっと、これは……こっちに置いとくか……。

カレンダーを持って、隣りの部屋へ。

妻 出てくれて言ってたわよ、明日の集会。

夫の声 聞こえてた、聞こえてた。

妻 出るの？

夫の声 出られないよ。

妻 どうして？

夫の声 だって、明日、エレーナさんを見送りに成田まで行かなきゃならない。

エレーナ いえ、それはいいです。

夫、出てきて。

夫 いや、そういうことにしといて下さい……どうみつもりでも往復5時間……集会は無理だよ。

妻 夜よ、集会は。

夫 嘘?!

妻 夜ですよ、何言ってるの。

夫 夜? エレーナさん、明日、飛行機、何時だっけ?

エレーナ 10時40分です。

妻 充分、間に合うじゃない。

夫 いや、でも、野島さん、一緒に見送りに行くわけじゃないから……わからないだろ、何時の飛行機か……ま、そういう話はいいよ。

この時、玄関で 「すみません!」^{*49}

夫 野島さんだ……!

清彦 あ、この、タバコじゃないの?

夫 おい……さっと持って……あ、靴。

エレーナ 私が持っていきましょう。

夫 え?

エレーナ、野島のタバコを持って玄関の方へ。

夫 (妻に) 行かなくていい?

妻 タバコ返すだけよ。

夫 そう……。

清彦 (ミカンを食べている)

夫 (ので) ……あ、ミカン食べてんだ。

清彦 あ、いただいています。

夫 いやいや、そうじゃなくて……。

清彦 おいしいですね、これ。(と、カゴを夫の方に差し出す)

夫 あ、ま、あとで……(玄関の方を気にして) ……しかし、なんで、タバコなんか忘れるかね……。

清彦 こないだも忘れたんでしょ?

夫 そうだよ。

清彦 ……。

夫 え? ミカンおいしい?

清彦 ええ、甘くって。

夫 (ミカンをとって) あとでいいか……(と戻す) ……(玄関の方) 手間どってるな……たかがタバコなのに。

清彦 ボク、見てきましようか。

夫 いいよ、いいよ……二人も行ったら、そりや変だよ。

清彦 そうですか。

夫 うん……大丈夫だろ……あ、カレンダー、見てみる? 買ってきた奴。

夫、隣りの部屋へ。

清彦 もともとの仕事、何だっけ？

妻 野島さん？

清彦 うん。

妻 会社づとめよ。なんか薬か何かの会社。

清彦 会社か……。

夫、カレンダー広げながら戻って。

夫 これこれ……なるべくシンプルなデザインのものを選んだ方がいいと思ってさ、これともうひとつ。

エレーナが玄関の方から戻ってくる。

夫 あ、渡してくれました？

エレーナ ハイ。

妻 タバコトりに戻っただけ？

エレーナ タバコのことでした。

夫 (すでにカレンダーのことは忘れて) 靴……靴、大丈夫だったかな……。

エレーナ ちょっとお話をしました。

夫 え？ なかったのに今はある靴のことを？

エレーナ いいえ、明日の私の飛行機のことです。明日の夜だと言っておきました。

夫 あ……。

妻 あなた、どうするんですか。フランスの方にまでアライつくってもらって。

夫 いや……あ、そう……。

妻 ひとりでは生きていけないってことよ。

夫 おまえ、そんな……。

妻 (エレーナに) ごめんなさいね。変な気をつかわせちゃって……。

エレーナ いいえ、私はパリに帰るだけですから。

清彦 でも、なんで、そんなにイヤなんですか、その集会？

夫 どういうわけか、間が出来てしまう。

妻 さてと！

妻、立ち上がって台所へ行くこうとして。

妻 あ、そうだ……(清彦に) 額田さん、かえって、謝ってらしたわよ。あんたが警察に

まで行ったって聞いて。

清彦 あ、そ。

妻 レッカー車が来たんですかア……なんて言われちゃって……。

清彦 ホントかなあ……。

妻 何がよ。

清彦 自分とここで呼んだんじゃないの？

妻 あなたも……反省ってことをしない人ねえ……。

妻は台所の方に引込む。

夫は、ミカンを食べはじめている。

清彦 ……。(何となく笑って夫を見る)

夫 ……(ちよっと笑って、返す) ……いや、私は別に集会そのものが……。

エレーナ そう、ともぐいでした。

夫 え？

エレーナ (清彦に) ともぐいです、さっきの……トムじゃなくて、とも。

清彦 ともぐい……ああ……え？ 何の話だっけそれ。

エレーナ え？

清彦 なんて、ともぐいなんて言葉が出てきたんだっけ？

エレーナ いえ、私とその言葉の意味を知りたかったから、それだけよ。

夫 (ミカンを食べながら) ともぐい……(嬉しそうに) 面白い日本語をおぼえましたね

……英語だと、イート・イーチャザーってとこかな……。

エレーナ さっきの野島さん？ あの人がその言葉をつかったんです。

夫 ホウ……。

清彦 何か政治のことでしょう。あの人のことだから。

夫 え？ 何が？

清彦 議員同士がともぐいしてるとか、そんな使い方したんじゃないですか？

夫 ああ……(うつちゃってあるカレンダーを見て) おい！ 何をやってんだ。オレは

(拾いに行く)

カレンダーを拾い、台所に行った妻の方を気にしていると。

清彦 なかなかいいじゃないですか、それ。

夫 ん？ うん……ホラ、こういう風に、2カ月ごとに……。

清彦 ええ……。

夫 (妻は) ……何してんだ……。

清彦、縁側の方へ行って外を見る。

清彦 しかし……(とりあえずそう言った) ……きょう何日？

エレーナ 25日です。

清彦 25……あ、そかそか……きのうがクリスマス・イブだったんだから……意味不明に) うーん……。 (とつぶやく)

夫 (ひとりごと) 洗いものでもしてるかな……。

清彦 用意はいいの？ 荷づくりとか。

エレーナ 大丈夫よ。

清彦 ……寒いだろうな、パリは……。

エレーナ 感想は聞かないの？

清彦 感想？ 何の？

エレーナ 私がはじめて蒲団でねむった感想よ。

清彦 ああ……変わらないだろ、蒲団もベッドも。

夫 そうか……エレーナさん、はじめてだった？ 蒲団は。

エレーナ ええ、はじめてでした。

夫 どうでした？ 便利でしょ。ねがえりうってもおちないから。

エレーナ 面白いですね。海に浮かんでる島のように。

夫 島……あ、たたみの上だね……ただ、あの、あげる、おろすって作業がね……日本人がよく働くって言われるのは、あそこらへんから来てるんでしょうね。朝起きたら、まず働く、この習性がね。

エレーナ ……。 (うなずいている)

清彦 夜、ねる前にも、ひと仕事ってことになりませぬ。

夫 そうそう……で、これが結婚したりすると、どっちが蒲団を敷いたり、あげたりするかってことで、主従関係が決まってくるんですよ。^{*50}

清彦 え？ そうですか？

夫 そうじゃない？

清彦 いや、ボクは……。

夫 ま、一概には言えないだろうけどさ。

清彦 普通、女房がやりませんか？ そういうこと。

夫 そ、ま、普通はね。

清彦 オレは蒲団のあげおろしはやったことなかったな……。

夫 あ、ぜんぶヨリコさん。

清彦 でしたね……え？ 義兄さんとは？

夫 うち？ うちは……これからしばらくは、私かやることになるだろうね……なにしろ、とりあえず、重いものはね……。

清彦 ……。

妻が出てくる。

夫 何してたの？

妻 ん？ 洗いものが残ってたから。

夫 あ……。

妻 エレーナさん、お昼ごはん、食べてらっしゃるでしょう？

エレーナ え、お昼ごはんですか？

夫 食べていきなさいよ……もう荷づくりだって終わってるんなら。

エレーナ あ、じゃあ、私も手伝わせて下さい。

夫 そういえば、全然平気だね。

妻 え？

夫 かまぼこ、かまぼこ！ 昨夜のかまぼこ！ 腹痛を訴えるもの、一人とてなし！

……ざまあみる……ハハハ……。

いずこからかピアノの練習をしている音が聞こえてくる。みな、何となく、その音に耳をうばわれる……。

夫 (隣の部屋の時計を見て) ……うん……もうお昼か……。

妻 (エレーナに) 今夜も泊まっていければいいのよね。

エレーナ きょうはホテルに戻らないとダメです。

妻 そう……そうよね……(清彦に) あんた、何してるの？

清彦 何って……ここにいないんじゃない。

妻 だから、そこで何してるのかって言うのよ。

清彦 ここで……何だ……陽なたぼっこでしょう。

妻 ……。

夫 (ピアノのこと) これは……どこだ？ このピアノは。

妻 上村さんちよ。

夫 上村……ああ……上村ね……(音が止んだので) アレ？ ……(またはじまったので) おう。

これを不条理と言うべきなのだろうか。皆、話すことが何もないのだ。むろん、動く動機も。しかしながら、その様は先刻エレーナの言った、さかずに満たされたお酒と、様子を同じくしている、と言えはしまいか。充分なのに、人は次の一滴を注がずにはいられないのだ。生きていくという証を求められているからだとしたら、こぼれおちる一滴、すなわち多すぎる一滴を注ぐことこそが、生きていく証と言わねばならない。それは、エレーナが言うように、足りないという意識が司るものなのだろうか？⁵¹

清彦 ……あれは、あたりまえのことなんだろうな……最初っから学校が、ああいう建物だ……ことは……入学した時からあの建物に通うことになった小学生は……オレたちの頃は、木造の、こう……も……(言葉を捜し) ……ぬくもりがあったけどな……ぬくもりって言っちゃいけねえな……何だ……すき間か……冬はちゃんと寒かった……ん？ 言ってること矛盾してるか？

エレーナ あなたが通った小学校？

清彦 オレだけじゃないよ。姉さんだって通ったさ……だって、こんな近いんだもん。忘

れ物しても、休み時間に、取りに帰れる距離だった……。

エレーナ お腹のこともは、この小学校に通うことになりますね。

妻 え？ そんな先のこと……わからないわよ、どうなるか。

エレーナ どうしてですか。

妻 私たちがここを引っ越してるかもしれないじゃない。

エレーナ え？ 引っ越す？

夫 いやいや、例えばですよ。

エレーナ あ……。

清彦 姉さん、母子手帳はもらってきたの？

妻 まだよ。

清彦 なんて？ あれ、区役所でくれるんだよ……安藤先生の証明書はもらってるんだろ？

妻 いいでしょ、私のペースで。

清彦 いいけど。

妻 何言ってるのよ、自分の妻と子ども、ほっぽり出しといて。

清彦 え？

夫 ほっぽり出すって、そんな……。

妻 ほっぽり出してるのよ。責任とってないでしょ？ あんた、だからヨリコさん、自分で働き出したんじゃない！ だいたいあんた八王子、八王子って気軽に口に出れないはずよ！ おまけに車まで借りて！

清彦 ちよっと待ってよ。

妻 何よ。

清彦 責任とってないって、なんでそんなことが言えるんだよ、姉さんに！

妻 とってるの？ え？ とってるの？

清彦 どういうことなんだよ、責任をとるっていうのは!! 金のこと!! 金のことかよ!

妻 お金もそう!

清彦 も!! じゃあ他に何!?

妻 じゃあ他に何って、あんたね、その前に、どうなのよ、人にそういう風に聞き返す前に、自分のやってること、やってきたことを、自分で冷静に見る余裕はないの!! そういう男らしさは!! なんて吠えるの、そうやって、犬みたいに!

清彦 わかんないよ、言ってることが! お金なら渡してるよ!

妻 充分!?

清彦 充分? 充分かどうかわからないよ!

妻 何それは!! 振り込み!! 銀行振り込み!!

清彦 え!

妻 どうやって渡してるのよ、お金は!?

夫 (妻をとどめて) おい。

妻 ……。

清彦 何言ってるんだよ……結局、お金のことじゃねえかよ……。

妻 なんて八王子にフラフラ遊びに行ったり出来るの!? ほっぽり出した妻と子のところ

に！

清彦 悪いかよ！

妻 悪いわよ！

清彦 なんでだよ！

妻 行って、あがり込んで、旦那づらしてるんですよ！ あんた？ ヨリコさんの前で！
別れたんでしょ!? 失敗したんでしょ!? 結婚に！ 悩んでよ！ じっと悩んで！
しかめっつらして悩んで！ ヨリコさんは、あんたをうらむのよ、うらみつつけるの
よ！ だからあんたは、それにじっと耐えて、耐えて耐えて、少しは大きい木に育っ
て！ 見てごらんさいよ！ 木は、樹木は、草は、花は、そんな風に育ってるわ
よ！

清彦 ……。(うつむいて笑ったように見える)

妻 何を笑うの？⁵²

清彦、立ちあがり、玄関の方へ行こうとする。

妻 逃げるの？

清彦 いいだろ、別に

清彦、いなくなる。

夫 ……。

エレーナ ……。

妻 お昼ごはんの用意しなきゃね。

立ちあがって、妻も引っ込む。

エレーナ ……(台所の方を見て) 私、手伝いたいのですが……。

夫 大丈夫、大丈夫。

エレーナ ……。

夫 ま、大丈夫でしょ……(おもむろに話し出す) ……集会のことだけどね……その……
生理的にイヤなんだね。ああいうものが……どうしてそういう風にかしこまんなきや
ならないの？ って、そういう気になってしまっただな……(夫は、話してもしよ
うがないエレーナ相手に話してるわけだった) ……なぜあの欺瞞にみんな耐えられる
んだろう。いや、むしろ、なぜあの欺瞞が嬉しいんだろう、と思うと、私は不思議で
ならないんだ……欺瞞だよ。集会が終わるでしょ、そうすると、みんな、お疲れ様
とか言っつてやっつと解放されたみたい、どうですか一杯とか言うわけだよ……人間に
はそういう時間が必要なんだろう。いわば欺瞞とわかっていても、必要以上に、
他人だと感じ合う時間が……早い話が、その時だけはいい語で話し合う時間
が。集会を離れば、おい、おまえで呼び合う仲でも。もしそういう時間が必要なら
ば、私は、なぜそういう時間が必要なのかをわかりたい。人間にどうい作用をおよ

ぼすためにそういう時間が必要なのか。人間を何からどういう風に回復させるために、そういう時間が必要なのか。

エレーナ　ぎまんて何ですか？

夫　ぎまん……ぎまんは、嘘かな……。

エレーナ　嘘……嘘の時間てことですね。

夫　……。 (ポーツとしている)

エレーナ　スポーツに似ているんでしょいか。

夫　……。 (エレーナを見る)

エレーナ　何か、ルールがあつて、その中でみんなが一生懸命になる……ホラ、こたつですよ、シュールレアリスム……家の中にもうひとつ家、こたつという家は、この家から見たら嘘の家ですね、こたつのルールは……(こたえを捜して) こたつのルールは何でしょう？

夫　一生懸命ね……。

ふたりともこたつの方を見る。

夫 (ちよつと笑いながら) テレビのそばに居る必要があることかな……。

エレーナ　テレビのそばに一生懸命？

夫　確かにテレビのそばに一生懸命いるかもしれない……。

エレーナ　テレビがつかなかった時、こたつは、とても寂しかったかもしれないね。

夫　一生懸命になれなくてね……。

妻が奥の廊下を。

妻　おしょう油がきれてるから、ちよつと買ってきます。

と言って通りすぎる。

夫 (追うように) あ、オレが行ってくるよ。

しかし、妻は勝手に行ってしまう。

夫は、戻りながら、カレンダーを拾い、それを隣りの部屋に持ってゆく。

夫の声　あ、このノート、きょうも何か書いたの？

エレーナ　あ、見ないで下さい。

エレーナ、ノートを取り返しに隣りの部屋に行く。

夫の声　だって、私か見たってわからないよ。フランス語なんだから。

エレーナの声　でもイヤです。

夫の声 ちょっとだけ、どういう感じなのかだけ！
エレーナの声 やめて下さい！ 恥ずかしいです！

その、聞きようによっては卑猥ともとれる会話が隣りの部屋から聞こえてくる時、清彦が、着替えて、あらわれる。
二人とも清彦に気づいたのだろう。
急に静かになる。

清彦 ……行こうか。送ってくよ。

夫の声 あ、今、しょう油を買いに行ったんだ……。

清彦 誰がですか？

夫の声 女房。

夫、出てくる、その手にノート。

清彦 ……。(そのノートを見る)

夫 ……(自分も見て) あ、エ、エレーナさん……これ。

エレーナも出てくる。そして差し出されたノートを受け取る

エレーナ ……。

夫 ちょっと待ってた方がいいだろ……帰ってくるまで。

清彦 ……。

エレーナ 私、お昼ごはんの手伝いを……。

夫 そう、それもあるし……。

清彦は、エレーナの手からノートを奪うと、それこそいきなり、そのノートをビリビリとやぶき出す。

エレーナ *Qu'est-ce que tu fais ?!*

夫 なぜ!?

清彦 (エレーナに) 何を思いつくの、アヤウ……。

エレーナ *Je ne comprends pas. Je ne comprends pas. Pourquoi tu as fais ça ?* (わからない、わからない、どうしようもないの?)

清彦 *Ne pose pas de question, c'est pour ton bien !* (質問なんかするな。全部キミのためだー)

エレーナ *Pour mon bien - J'straends une explication. (私のため!? 説明してちょうだい)*
(い) *Après ce tu viens de faire. (あなたは、こんな失礼なことをしたんだから) tu as intérêt à me donner une explication. (説明する義務があるわ)*

清彦 *Je vais t'expliquer. J'en ai ras le bol de ton carnet !* (説明するよ。うっとうしいんだよ。

そのノートー) C'est tout -. (それが全部だー)

エレーナ Ras le bol? Ca, c'est ton point de vue. (ぶこやうしい?)

それはあなたの感情です

わ)Maintenant je voudrais bien que tu m'expliques ce que tu veux. (あなたは私のためにならぬいって言ったわ。その)この説明をしてちょうだいー) dire par " C'est pour mon bien"

清彦 ……。

エレーナ Alors? Tu es incapable de t'expliquer ㄨ (た)うしたのㄨ 説明出来ないの(ㄨ)

清彦 Tu vois, c'est ce que je disais. Exactement comme ton carnet. (それだよ。その言い方、

それがキミのノートじゃないかー) Incapable d'expliquer(ㄨ) Incapable d'expliquer(ㄨ)

Incapable (説明できないの(ㄨ) 説明できないの(ㄨ) 説明できないの(ㄨ) d'expliquer(ㄨ) ce ne sert a rien de repeter. (そんな)ことを叫びつづけて何になる(ㄨ) Tu vois a quel

point ce besoin de comprendre te rend pitoyable ㄨ (えㄨ その精神!?) そのわかりたい

というキミの精神がキミをどれほどかわいそうな人間にしているかっというところがわからないのか(ㄨ) Tu condamnes tout ce qui est en dehors de ton systeme de (キミにはぎつと、何か大きな精神的な柱があって、そこにたどりつかないものを断罪するんだ。

valeurs. Il y a des choses parfaites et imparfaites, (完全なもの不完全なものがあっ

つ) toi, tu pour suis l'imparfait en brandissant le drapeau parfait. (不完全なものを追いかける)とするとするんだ。完全という旗をふりかざしながら!?)

エレーナ Tu veux dire que je me crois parfaite ㄨ (私が自分のことを完全だと思ってるっつ)と(ㄨ)

清彦 Parfaite ㄨ Parfaite ou pas tu ten fiches. (キミが完全か完全でないかなんてキミには

どうでもいいこと(ㄨ)と(ㄨ) tu ne VIS ni dans un monde parfait ni imparfait. (キミはこの不完全の世界に参加してない) Tu ne t'intéresse que ce carnet. キミが参加するのは

そのノートだ! (ㄨ)Alors que tu sois parfaite ou pas, dans ce monde, peu importe. (だからキミが完全か不完全かなんて、どうでもいいこと(ㄨ)と(ㄨ) この世界でー) ⁵⁴

エレーナ ……。

清彦 ボクはキミを失望させたいね。徹底的に失望させたいよ……。

エレーナ Mon systeme de valeurs ……(私の精神的な柱というのは……)

清彦 日本語でしゃべれよ!! (ここは日本なんだ!)

夫は、やぶかれたノートを拾いあつめている。

清彦 (夫に) 本人にやらせて下さい……。

夫 いや、しかし……。

清彦 拾うでしょ、拾いたければ。

夫 ……。

清彦 (気持ちを整理する風に) ええっと! ……何だ……ボク、ちよっとタバコ買ってきます。

清彦、出ていく。

エレーナ ……。

夫 (照れるように) いや……ほとんどわかんなかったけど……。 (と、また拾おうとする)

エレーナ いえ、私が……(拾う) ……私は参加しないと清彦は言いました……このノートがその証拠だって……。

夫 参加してない……何に？

エレーナ (ちよつと考えて) 生活……でしようか……。

夫 生活……いや、ここは日本だし……エレーナさんにとって、生活はまだ。

エレーナ ううん、ちよつとちがうかな……。

夫 ……。

エレーナ 私は、どう見えますか？

夫 え……どう見えるって？

エレーナ つまり、私は何を求めている人間なのか……そのために、どういうことをしようとしている人間か……。

夫 それは……文学を……日本の文学を勉強するために、日本の大学に……。

エレーナ ……。

夫 そういうことじゃなくて？

エレーナ ううん、そういうことです。

夫 ……。

エレーナ (自分で納得するように) そうですね……。

夫 (ノートを) ああ……これはフランス製のノートなんだ……あ 『山の音』読んでないな……正月の間に読むかな……。

エレーナ 美術史も書かなければいけないでしょう？

夫 ああ、うん、それは、書いてます。

エレーナ 印象派までいきましたか？

夫 そう今、まさに印象派に入ったところです……光の印象……彼らの絵具の使い方について今書いているところです。

エレーナ どういう使い方ですか？

夫 うーん……簡単に言うと、ある色を表現するために、絵具を混ぜ合わせない、混ぜていない色を細かく並べることで、離れてみると、混じり合っている色に見える……そういう方法ですね。

エレーナ AH……。

夫 ……。(ちよつと照れたような)

エレーナ 好きですか？

夫 え？

エレーナ 印象派の絵は好きですか？

夫 ええ、もちろん。

エレーナ エドガー・ドガの『エトワール』は？

夫 あ 『踊り子』ですね……え？ どうして？

エレーナ あの花は、胸がいたみます……。
夫 ……。

エレーナ カワバタの『山の音』の中に、こういうところがあります。電車の中で顔がそっくりの父親と娘が並んですわっているのです。主人公がそのふたりを見ています。ふたりは何も話さないですわっています。だから主人公は、ふたりはとても平和な家庭の父親と娘だと想像します。が、ある駅で、娘だけが降りていきます。父親の方はねむったまま……わかりますか？^{*55}

夫 え？

エレーナ 二人は、父と娘ではなかったのです。まったくの他人だったのです。あんなに顔がそっくりだったのに……主人公は急にその男が、つまらない男に見えてしまします……。^{*56}

夫 ああ……。

エレーナ エドガー・ドガの『エトワール』を見ると、あの「エトワール」の父親のことを私は思います。きっとあのエトワールは、一人っ子？ 一人っ子ですね……父親のために、父親の妻になることを夢見ているのです……。

夫 ……。(言葉もなくて)

エレーナ、照れたように、縁側に行く。

エレーナ 庭は……あの花は、奥さんが？

夫 ええ……。

夫も縁側に行き腰をおろす。

夫 こういうの縁側に腰をおろすって言うんですよ。

エレーナ 縁側に腰をおろします……。(と言って腰をおろす)

ふたり並んですわっている。^{*57}

エレーナ どっちがいいですか。男の子、女の子……。

夫 え？

エレーナ 生まれてくるこども。

夫 ああ……。

夫、こたえず、ただへらへら。

エレーナ ん？ どっち？

夫 あ、そうだ。テープがある。ノート、テープでつけてあげますよ。私がテープで。

夫、エレーナのノートを持って立ちあがり、隣りの部屋にテープをとりに行こう

とすると、妻がしょう油片手に戻っている。

夫 あ……。

妻 何？

夫 いや、テープを……。

妻 今、お昼の支度をしますから。

夫 あ、うん……。

妻、台所の方に引っ込む。

夫、隣りの部屋へ。

夫、テープを持って出てくる。そして、テープとノートをエレーナの方に差し出して。

夫 こ、これでつけて下さい……。

エレーナ ……。

暗転

4 1月1日 祝日

近所の軒先に日の丸の旗が見える。

光はすでに午後のものだ。

電話をしている清彦。

妻は、卓の上のものを片づけている。

どうも客が帰ったあとのようだ。

清彦 いや、別にずっといるつもりでもないしき……え？ だから、来年、いやもう今年

か、1月2月のうちには……いるよ、日本に……あれ？ 知らなかったっけ？ もう

別れたよ……(笑いながら)何を言ってるんですか！ ……パリ？ いや、一度引き払

ったから……うん、別に住所ってのは……

妻が片づけものを持って、台所の方へ引っ込む。

清彦 ええっと……じゃあ……うん、わかったわかった……うん、行けると思います……

ほんじゃあ、ハイ、どうも。

受話器を置く清彦。

妻が戻ってくる。

清彦 (隣りの部屋の方を見て) なつかしいね……あれ。

妻 (見るが) ……。

清彦 こどもの頃は、あの床の間も、もっと大きく見えた……こうやってみると、イキな掛け軸なんだね。あれはカラスか？

妻 誰？

清彦 え？(電話のことだとわかって) あ……久保田……ホラ、高校の時の……フッフ

……ミニ同窓会でもやらないかって……いやあ、おどろいたな……急に電話かけてきて……。^{*58}

妻 顔洗ってきてよ。

清彦 あ……。

清彦、洗面所の方へ。

妻 (その清彦に) あ、歯ブラシ、新しいのつかって！ 加えといたから！ 水色のが、

あんたのよ！

清彦の声 わかったア……！

妻は、ひとりになって、隣りの部屋の方をあらためて見る。

清彦がなつかしいと言ったその掛け軸を見ているだろう。

妻 ……。

電話がなる。

妻 (とつて) ハイ、田島です……あ、ヨリコさん……あ、あけましておめでとうござ
います……え？ ああ……そうね……つわり？ 別に……あ、清彦いるわよ、かわり
ましようか……そう……あ、いらして……別に、何もないけど……あら、それ、ミリ
カちゃんの声？ まあ、意味がわかるわ……大きくなったんでしょね……(ミリカ
にかわったらしい) ……あ、ミリカちゃん、おばちゃんよ、わかる？ ……そう、わ
かってくれたのね、うれしいわ……なにに？ え？ 機関車トーマス？ アラア、わ
よかったわね……。

夫が入ってくる。正月らしい服装をして。

手に、年賀状の束を持っている。

妻 (その夫に目でおかえりなさいを言って、電話に。向こうはまたヨリコにかわつたらしく) あ、ヨリコさん、まあはつきりしてるのね。言うことが……5歳？ 5歳だっ
け……ちゃんと私のことも、おぼえててくれて……(夫を見て) いますよ、かわりま

しょうか？

夫 え？ 何？

妻 え、何なんて言ってますけど……(夫に) ヨリコさん、成瀬の友だちのところまで来たから、こっちに顔出そうかなって。

夫 出してもらえばいいじゃないか。

妻 じゃあ、ちよっとかわります。(夫に受話器を差し出して) ハイ。

夫 (ちよっとためらうが、受話器をとって) ああ、あけましておめでとうございます……いえいえ……(電話しながら、妻の肩を年賀状の束でたたき、ホラ年賀状と、それを渡す) ……ええ、もうきょうは、さっき、私の教え子が訪ねてきてくれてね……帰ったとこなんですよ……。

妻は、年賀状を見ている。

夫 あとはテキトーな時間に、教授ンとこに、まあ、年賀でも持って……ええ……アレ？

今、成瀬だとか……ああ、そう……いや、だから、こっちは大丈夫ですよ……あ、

そうだ清彦くん……(妻に) 清彦くんは？

妻 顔洗ってんじゃないの？

夫 あ、今、顔洗ってるみたいですね……そうですか……ええ、じゃあ、お待ちしますよ、ハイ、ハイ、どうも、失礼します……。(切る)

妻 (年賀状の一枚を見せて) これ、誰？

夫 (見て) 鈴木薫？ ……え？(といいながら、妻の手からそれを取り、眺めて) 株式会社、エコール・ド……あ、これ、画材屋さんだよ、大学に時々顔出してる……。(ハガキを返す)

妻 (受け取って) ……変わった筆跡ね……。

夫 毎年、来てるじゃないか。

妻 そう？

夫 来てるよ。どれどれ。

夫も年賀状を見出す。

妻は、読みかけの年賀状を全部、夫に渡し、しばし、ボーツとしているが、我知らず、或る歌を口ずさんでいる。

夫 ……。(その妻を見て)

妻 (口ずさむのを止めて) ……。

夫 (また年賀状を見始める) ……これは、キミだ……。 (妻よりに置く)

妻、立ちあがって、隣りの部屋に。

夫はちよっと気にするが、年賀状を見つづける。

妻の声 ヨリコさん、何時ごろ来るとか言ってたなかった？

夫 いや……。

テレビの音が聞こえてくる。

夫 こたつそれ、電気入れてないだろ。
妻の声 ……。

夫 入れればいいじゃないか。

間。

妻の声 あなた、何時ごろ出かけるの？

夫 佐伯教授んとこ？ うん、まあ、テキトーに。

間。

夫 おい……エレーナさんからだ。

妻の声 え？

夫 これ、日本の年賀状で……どこから出したんだろう……日本にいる時、出しておいたんだな……。

夫、隣りの部屋の妻に見せに行く。

夫の声 ……ホーラ、漢字もちゃんとつかってる……謹賀新年……（読んで）ちがう色も遠くから見ると混じり合っているんですね……ああ……（妻に説明して）これは、印象派のことで私が……。

妻の声 あて名があなたの名前になってるわ。

夫の声 あ……ホントだ……。

妻の声 ……。

夫の声 まあ、一家の主人でことなんでしょう……代表して、その……。

清彦があらわれる。

夫の声 あ、清彦くん、エレーナさんから年賀状だ。

清彦 え？

夫 ホラ、これ。

夫、年賀状持って出てくる。

夫 これ、ホラ。

清彦（見て）へえ……出しておいたんですかね、日本にいる時。

夫 そうだよ。

清彦 (ハガキを裏返して) ……。

夫 あ、これ、一家の主人でことじゃないかな、代表して、単に私の名前を……。

清彦 消印てのがないんですね、年賀状には。

夫 消印? ああ、そう消印がないよね。

清彦 (他の年賀状を見て) 年賀状か……。

ふたりとも、何となく、隣りの部屋の妻の方を見る。

清彦 義兄さん、きょう出かけるんでしょう?

夫 うん、ちよっと佐伯教授ンとこに。

妻の声 ヨリコさん、来るわよ。

清彦 え?

夫 あ、そう、来るって、さっき電話が。

清彦 (妻の方に) 何時ごろ?

妻の声 成瀬の友だちのところにいるって言ってたから。

清彦 成瀬……1時間くらいかかるかな……。

夫 (年賀状を集めて) あとで、ちゃんと見るか……。

茶ダンスの方に持っていく。

清彦 義兄さん、だいぶしたわれてるみたいですね。

夫 え? したわれてる?

清彦 教え子たちでしょ、さっき来てたの。

夫 ああ……。

清彦 正月早々……。

夫 別にしたわれてるってわけじゃあ……。

清彦 若い女の子の笑い声ってのは、なんかこわいですね。

夫 こわい?

清彦 ええ……何て言えばいいのかな……うーん……欲がきついつて言うのかな……。

夫 ……。

清彦 ちよつとずるい感じですかね……それがそうじゃないように仕組まれてるみたいで……こわいですね。

テレビの音が消える。

夫 笑ってたかな、そんなに。

清彦 笑ってましたね。

夫 何?

妻が出てきて、庭の方を見る。

妻 野島さん？

夫 え？

垣根の外から野島が中を見ていた。

夫と妻が、縁側の方へ行く。

野島 あ、こりや……どうも、あけまして、おめでとうございます。

夫 あ、おめでとうございます。

妻 (頭をさげる)

野島 きょうは自宅で、のんびり？

夫 ええ、まあ……。

妻 あ、どうぞ玄關の方に。

夫 あ、どうぞ。

野島 いえいえ、私、これからちょっと。

夫 ハア……。

野島 あ、26日の日はどうも……。

夫 いえいえ……。

野島 おかげさまで、しまりましたよ……(卓の方にいる清彦に) あ、清彦くん、どうも！

清彦 (頭をさげる)

夫 (その清彦を振りむく)

妻 (同じく)

野島 あ、奥さん、おめでたなんですって？

妻 え？

野島 女房に聞きました。*

妻 あ……。

野島 重ね重ね、おめでとうございます。

野島の近くを近所の人を通るので、

その人に野島は「あ、あけましておめでとうございます」と挨拶をする。

その間に、夫と妻は縁側から庭に降りる。

野島 ……あっちもこっちもおめでとうございますで……(と笑う) ……あ！

夫 どうしました？

野島 クギが……クギが出てた……。

夫 クギ？

野島 これは……。

夫 え……やぶけましたか？

野島 ええ……。
夫 すいません。
野島 まいったな……。
妻 どこでしょうか？
野島 ここです。(とやぶけたところを)
妻 あ……。
野島 これは不注意だな……。(クギを見る)

清彦が縁側まで来て、

清彦 どうしたんですか？

夫 クギが出てて。

清彦 ……。

野島 一度、うちに帰らなきゃダメだな……。

夫、縁側にあがり、玄関の方へ。

清彦 やぶけたんですか？

野島 ここ！ ここです！

妻 アレでしたら、私が今……。

野島 今、何ですか。

妻 縫った方が……。

野島 いや、縫うには縫うでしょうが、これちゃんと縫わないと……。

夫が、かなづちを持って、垣根の向こうにまわった。

夫 あ、これか……。 (クギを見て)

すぐに打ちはじめる。

野島 ぬいちゃった方がよかつたんじゃないですか？ さびてましたよ。

夫 いえ、もう大丈夫です。

妻 どうぞ中で、おトソでも。

夫 あ、どうぞ。

野島 とにかく、一度、うちに帰りますわ……ええっと、うちはこっちか……ちよつと混乱してるぞ……。

と言って去る。

夫 (垣根の上からかなづちを出し) これ……。(と妻に差し出すが、妻は花を見ているの

で、かなづちを引っ込める)……。

妻 (ポインセチアを見て) やだ……虫にくわれてる……。

夫 何？

妻 ポインセチア。

夫 虫？

妻 ここ、ホラ……。

夫、その妻をじっと見ている。

清彦は、隣りの部屋に引っ込む。

妻 (夫の方を見る)

夫 ……。 (ちよっとたじろぐ)

妻 何？

夫 いや……私は今、外にいるなと思って……。

妻 ……。 (こたえようもなく)

夫 (とりつくりうように) 他にクギは出てないかな……。 (と垣根の外側を見る)

妻は居間の方を見る。

と、隣りの部屋からテレビの音が聞こえてくる。

夫 (思い出したように) え？ 虫にくわれてる？

妻 そう、ホラ、ここ。

夫 (垣根を横に移動して、見ようとするが) フフフ……よく見えないな……。

妻 (夫が必要以上に楽しそうなので) 何よ……。

夫 よく見えないんだ、ここからだ。

妻 ちゃんと見せろって言うの？

夫 そんなことは言っていないよ。

妻 変なの……よろこんでる……。

夫 よろこんでないよ。

妻 だって笑ってるもの。

夫 笑ってる？

妻 笑ってるでしょ？

夫 そうかな……。

妻 何かやってるんじゃないの？ 私に見えないところで。

と、妻は垣根の向こうの夫の首から下の部分を見ようとす。

夫 何もやってないよ。かなづちを持ってるだけじゃないか。

妻 ……。

夫 ホラ、これ。

妻 どれ？ さびてるクギって。
夫 ここだよ。

妻 出てないじゃない。

夫 だって、オレがもう打ったから。

妻 たいしたことなかったでしょう？ 野島さん、あんなに大騒ぎしてたけど……だって、

クギなんか出てないじゃない。

夫 だから、それは、オレがもう打ったから。

妻 何をあんなに大騒ぎしてたのかしら。

夫 ……。

妻 なんだか疲れちゃった……。

夫 (その真意をつかみかねて) ……。

庭の中ほどまで来て、

夫 オレ、別に笑ってなかったらう？

妻 え？

夫 さっき、ここで。

妻 知らない……。

夫 知らないって……自分で言ったくせに。

夫 ……。(ため息)

妻 ……。(少し笑う)

妻、部屋の中へ。

妻 (隣の部屋に) あんた、何時ごろ出かけるの？

清彦の声 うん、もうそろそろ。

妻 ヨリコさん、来るのよ。

清彦の声 わかっている。

妻 ……。

テレビの音が消える。

清彦の声 うーん……そうねえ……。

夫は垣根から、玄関の方へまわる。

清彦の声 姉さん、相手しといてくれるでしょ？ あいつも、たぶん、どっちかだった
ら姉さんに会いたくないんじゃないかな……ああ、これ、カラスじゃないんだ……。

清彦、出てきて、

清彦 あの横に、かきぞめがくるんだよね……。 (意味不明に笑う)
妻 ……。

清彦 毎年出してんだ、あの掛け軸……。うーん、なつかしい！

夫 夫がかなづちを持ったまま人ってくる。

清彦 相変わらずですね。

夫 え？

清彦 野島さん。

夫 ああ。

夫、何となく縁側の方へ行き、さつき妻がいたあたりを見たり、自分がいたあたりを見たり。

清彦 義兄さん、どうだったんですか、集会は。

夫 ああ、出たよ。

清彦 意見とか、言ったんですか？

夫 意見？ 意見ね……。 (椅子にすわる)

清彦 おかげさまでしまりましたとか言っていましたね……。

夫 別にたいしたこと言ったわけじゃないよ。

夫、急に思いついたように、エレーナの年賀状をとりに行く。

夫 (それを見て、嬉しそうに笑う) これ返事書かなきゃな……。

妻 見せて、さつきちゃんと見なかった。

夫 そう、ホラ。

妻、年賀状をとって見る。

夫 清彦くんにも内緒にしてたんだ、年賀状、出してるってこと。

清彦 ああ……。ま、そういう奴なんでしょう。

妻 おたくでこのことをパリで話してあげます……。って書いてあるけど、誰に話すのかしら……。

夫 ま、知り合いだろ……。なんで？

妻 ううん、ただ……。

夫 ……。

妻 でも、想像がつかないわね。フランス人で、あんなに日本語をうまく話せて、ここで私たちといろんな話をして、今、パリにいるわけでしょ？

夫 え？ なになに？ 言ってることがわかんないよ。

妻 だから私がフランス語がペラペラで、しばらくパリのどっかの家庭にお邪魔してその家族と、いろんな話をして、そして、日本に帰ってきて、今、私はここにいる……そういうことでしょうか？

夫 ……。

妻 想像出来ないっていうのよ、そういう自分が……って言うか、それはどういう……。

(言葉を探す)

清彦 さて！ そろそろ、出かけてみっかな。

夫 え？ 出かけるの？ ヨリコさんは？

清彦 ま、それもあるんですけども、その前にちょっと約束してしまったものですから……その前に着替えないとな……ちよつと。

清彦、玄関の方へ、引っ込む。

夫 なんだ……出かけるんだ……。

妻 ……。

夫 ……そか……うん……。

妻は、なんとなく、家の中を見まわす。

夫 何？

妻 え？

夫 何か言いかけてなかった？

妻 ああ……。

夫 想像出来ない……。

妻 そうね。

夫は庭を見て、虫にくわれたというポインセチアの花を見に降りる。

夫 (見て) あ、ホントだ……くわれてる……油虫かな……。

しばし夫婦、言葉がない。

妻が立ちあがり、客用の座ぶとんを持って、隣りの部屋に行く。

それを見て、夫は庭から居間に戻る。

夫 (隣りの部屋を見て) うん……そこらへんにおいておけばいいだろ……またお客さんも来るだろうし……。

妻の声 ……。

夫 しかし、そんなに笑ってたかな……。

妻の声 ……。

夫 いや、あの子たち……(妻がCDのジャケットを見ているのだろう) あ、何か音楽でもかけるかい。

夫も隣りの部屋に行き、誰もいなくなるそこ。
或る音楽が聞こえてくる。

夫の声 この黒い鳥は何だろう……。

清彦が居間にあらわれる。

清彦 出かけます。戻れるようだったら、電話入れますから。^{*60}

清彦玄関の方へ行く。

妻が、つづいて夫が、隣りの部屋から出てきて、出てきたあたりに立つ。

夫が隣りの部屋に戻る。

妻は、居間の方に来る。と、夫も、居間の方に出てくる。

妻はエレーナの年賀状を茶ダンスの方に戻しに行く。その時、そこに飾ってあった小さなお供え餅の上のミカンを手にはひっかけてしまい、ミカンが転がりおちる。

夫 (それを少し笑って) フフ

ミカンとその上のにのっていたスルメをふたりで拾う。そしてもとに戻す。

夫 去年の正月も同じようなことしなかった？

妻 え？

夫 ミカンが転がりおちて……。

妻 そうだった？

夫 うん……いや、おとしかな、あれは。

妻 ミカンは転がりやすいつてことでしょう……。

夫 それ、格言？

妻 え？ 何て言っているかわからないわ。

夫 格言っぼいよ。

妻 だって思い出せないんだもの、その去年のことが。

夫 ……。

妻 え？ (茶ダンスの上を指して) ここにあったミカン？

夫 そうそう。

妻 転がりおちて？

夫 そう、転がりおちて。

妻 誰が拾ったの？

夫 誰って……だから二人で。

妻 ひとつのミカンを？

夫 もちろん、ミカンはひとつだよ。

妻 じゃあ、どっちかでしょう、拾ったのは。

夫 ……。

妻 変よ。こんなちっちゃいミカンをふたりに拾うなんて。

夫 そうか……いや、ふたりに拾ったような気がするな……。

妻 他に何かない？ その……思い出すのに、何かヒントになるようなこと。

夫 ヒント……。

妻 あ、あの時ねって思い出せるようなことよ。

夫 あの時じゃない、正月なんだよ、去年の。

妻 だから、もっと、瞬間のことよ、正月とかそういうんじゃない。

夫 あ……そか……うん……瞬間……ちょっと待って、今思い出すから。

妻 どっちかが何か言ったとか、そのミカンを拾う時。

夫 うん……。(考えている)

妻 去年？

夫 (考えてるんだから) ちょっと待って。

妻 ……。

夫 ダメだな……集中出来ない……確かにここで……。

妻 じゃあ、やっぱり、去年の正月全体的ことから思い出した方がいいのかしら。

夫 ……。(妻を見る)

妻 (それを疑惑の目と感じて) ホントよ、だって、私は、まるっきりそんなこと……。

夫は思い出すことをあきらめたようだ

夫 ……。

妻が庭に面したガラス戸を閉めようとすると、

夫 開けといて。

夫は、隣りの部屋に行く。

音楽が止む。

夫の声 どうしてあんなこと言ったの。

妻 え？

夫の声 この家を売って引っ越そうなんて。

妻 ……。

夫の声 オレは別に肩身の狭い思いなんかしてないよ。

妻 そんなこと……そんなつもりで言ったんじゃないわよ。

夫の声 わかんないな、どうということなんだろう。

テレビの音が聞こえてくる。

妻 ……。

夫の声 だいたいさ、なんで清彦くんがあんなによろこぶ必要があるの!?

妻 何を?

夫の声 こどものことだよ!

妻 え?

夫の声 自分のこどもでもないのに! オレのこどもだぜ!

妻 よろこぶって、別にそんな……。

夫の声 よろこんでるだろ? よろこんでるじゃないか! 女の子がいいとか! オレ

は男の子の方がいいよ! でも言えないよ、先にああいう風に言われると! だからさ、オレは、まるで、こどものことをよろこんでないみたいなために立たされてしま
うわけだよ! ちがうかな!?

夫、出てくる。

夫 だからさ、キミが引越そうなんて言い出すのはね、すごいギマン的なわけ! (ほと
んど泣き出しそう)

妻 え……ギマン的?

夫 ……。

妻 わからないわよ! ちゃんと説明して!

夫 説明して欲しいの!?! 説明して欲しいの!?! するよ! たぶんキミはさ、自分の問題

だって言うと思うよ、その引越しのこと! でもちがうんだよ!

妻 ちよっと待ってよ。私の問題じゃないわ。私とあなたの問題よ。

夫 問題! ボクとキミの問題! 面白いな、どういう問題、それは!

妻 問題じゃない……それは言葉がちがうわ。私たちのこと、ただそれだけよ。

夫 え?

妻 私とあなたの生活よ。

夫 生活……生活が何?

妻 新しくはじめましょうってことでしょ!?

夫 どうして新しくする必要があるの!?! え? どうして新しくする必要があるの!?! そ

れだよ。ギマン的だって言うのは! 耐えてきたわけでしょ、われわれは、この10年
間、何かに! あえて何かって言うけどさ……耐えたことの意味は何!?! 耐えた10年
間は何!?! え? 新しい生活!?! 新しくなる!?! この生活が! そういふギマンは

妻 (悲痛に) やめて! ギマンなんて言葉つかうのは!

夫 ……。

妻 やめて……。

間。

妻 随ろせばいいわけでしょ？

夫 え？

妻 そうすれば新しくない生活がつづくって言うんでしょ？ あなたの望む新しくない生活が。

夫 何言ってるの……。

妻 そうすれば耐える意味はつづくって言うんでしょ!? そうよ、私は新しい生活が欲しかったのよ。イヤなのよ、この家に住みつづけることが。理由は、そうね。影よ、影があるからよ。陽の射さないところがあすぎるわ、この家には、それとおい！病院のにおいよ！ 玄関を入ると私は今でも、診察室から流れてくる薬品のにおいがたまらない……ごめんなさい。診察室じゃないわ。あなたの書斎よ、今はね……そのにおいが、きっと私だけにしかにおわないんだってことも私は知っている……私はじっとして……じっとこの家に住んで……そして見られるのよ、この家に住みつづけている女だって……そして例えば清彦！ 日本に帰り、当然のようにこの家に住みつづけるのよ。じゃあ私は何？ 当然のようにあの子が住みつくこの家に住みつづけているこの私は！（苦しいから笑って）家よ。家そのものよ。そんなバカなでしょ？ ちがうわ！ 薬品のにおいなんかじゃないわ。私のおいよ！ 玄関を入ると、私のおいがするの！

間……テレビの音だけが聞こえている。

夫 オレは、随ろせなんて、そんなこと言ってるわけじゃない……。

妻 いいのかしら、産んで。

夫 いいさ……。

妻 ……。

夫 キミが今言ったことはさ……オレに対する気づかい……気づかいみたいなものは含まれてないかな……。

妻 気づかい？

夫 だから……。

妻 どういうこと？

夫 どうしてもキミが中心になるってとき、この家に住みつづけた人間でこと……。

夫 それと、どうしても問題は、結婚した時のことにさかのぼるけど……。

テレビの音が突然消える。

夫 （テレビの方を見る）……。

妻 （同じく）……。

夫 人？

夫、隣りの部屋に入ってゆく。
ほどなく夫、出てくる。

夫 ま、いいや……。

妻 どうしたの？

夫 テレビが見つからない……。

妻 ……。

夫 ま、いいよ……(言いなおして)どうしてもわれわれが結婚した時にさかのぼる
けど……。

妻 ちよっと待って、さかのぼる必要はないわ……。

夫 どうして。

妻 だって、気づかないなんてないもの……さっきのその……。

夫 でもキミは、その前、自分だけの問題じゃない、ふたりの問題だって言ったよ。

妻 問題なんて言わないわ。生活だって言ったのよ。

夫 ……。

妻 ……。

夫 生活って？

妻 ……。

夫 ……。

妻 生活よ……。

「ごめんください」という女の声。

妻が立って、玄関へ行く。

夫 ……。

妻が戻って、

妻 あなた、ヨリコさん。^{*62}

夫 え、あ、そ。

ヨリコがあらわれる。

夫 あ、どうも。

ヨリコ、奥の廊下にすわって、

ヨリコ あけましておめでとうございます。

妻 あれ？ ミリカちゃんは？

ヨリコ ええ……。 (少し笑う)

夫婦 え？

ヨリコ その道端で……同じ年頃の子どもたちが遊んでるのを見て、私も遊んでいくつて……。^{*63}

夫 え？

妻 アラ……わかるの、この家。

ヨリコ ええ、ちゃんと。

妻 そう……。

ヨリコ 変な子なんですよ。

夫も妻も感心したような間。

ヨリコ あ、これ、つまらないものですが……お年賀です。

妻 いいのに、そんな……。

夫 早かったですね。成瀬からでしょ？

ヨリコ ええ、道が空いてて、

妻 ああ、お正月はね……。

夫 ん？ 車はどこに？

ヨリコ あ、近くの空き地みたいなのところに。

夫 額田さんちの前かな。

ヨリコ (人を捜すげ)

妻 (なので) あ、清彦、出かけてしまったのよ……。

ヨリコ そうですか……。

夫 あ、座ぶとん。

夫、隣りの部屋から座ぶとんを一枚、持ってくる。

夫 どうぞ。

ヨリコ どうも。

妻 おとそ、大丈夫よね。

夫 大丈夫って？

妻 車。

夫 ああ、大丈夫だよ、そんなの。

妻、台所の方へ。

ヨリコ お義兄さん、きょうは……。

夫 ええ、ちょっと上司のところ。

ヨリコ これから？

夫 ええ、これからです……(隣の部屋を見て) あ、もうこんな時間か……(そして、テレビを見る) ……困ったもんだな、松波さんにも……。

ヨリコ え？

夫 テレビのね、修理をしてくれたんですが……それも、ほんの1週間前ですよ。

ヨリコ ……。

夫 また、うつらない……。

妻、おとその道具を持って出てくる。

夫 (妻に) 何なの、あの松波さん。

妻 ああ。

ヨリコ なつかしい。

妻 え？

ヨリコ あの掛け軸。

妻 見たんだった？ あれ。

ヨリコ ええ、何年前かな、お正月に……。

夫 行ってくるか！(立ちあがる)

妻 え？ お正月よ。

夫 正月だって何だつて、うつらないものはうつらない……フン、寝込みをおそってやる

……(ヨリコに) ゆっくりしてって下さいよ。風のように行って、風のように戻って

きますから。

ヨリコ ……。(曖昧に笑う)

夫 行ってくるわ。

妻 私、知りませんよ。

夫 いいよ、オレの一存で行ってくるから。

夫、玄関の方へ行く。

妻は、奥の廊下まで、見送る感じ。

妻 (ヨリコに言いわけするように) まったく……。

ヨリコ ……。

妻 あ、おとそ。

妻、ヨリコにおとそを注いでやる。

それを飲むヨリコ。

ヨリコ おいしい……。

妻 これ。

ミカンとスルメと干し柿をヨリコに出す。

ヨリコ あ……。

妻 占って、今年の運を。^{*64}

ヨリコ (笑いながら) 何だかこわい……。

妻 ……。

ヨリコ お義姉さん、どうですか、体の方は。

妻 体？ ああ、大丈夫よ。

ヨリコ これ……(と風呂敷づつみを出して) 今度、いつお邪魔できるかわからないから……と思つて……。

妻 何？

ヨリコ 赤ちゃんの……。

妻 え？

ヨリコ おさがりで失礼だと思つたんですが。

妻 え？

ヨリコ こういうのを……。

いくつか見せる。

妻 (笑つて) 何だか困つてしまつて……

ヨリコ お氣にめさないものは捨てちゃつて下さい。

妻 ……。

ヨリコ ホントにいつお邪魔できるかわからないと思つて……。

妻 ありがとうございます……(夫がそこらに置いてあるかなづちを) やだ、こんなところに。

かなづちを持って玄関の方へ行く妻。

ヨリコは庭を見て、縁側に行き、そして庭に降りる。

妻が戻ってくる。庭にいるヨリコを見るが、隣りの部屋に行く。

ヨリコ、庭から居間の方に戻る。

妻も、隣りの部屋から居間へ。

妻 大丈夫？

ヨリコ え、何が？

妻 ミリカちゃん。

ヨリコ ああ、ええ……あれは、ポインセチアですね。

妻 そう……あ、じゃあこれ、いただいておきます。

ベビー服を持って、また隣りの部屋へ。その方を見るヨリコ。

ヨリコ あれ……掛け軸は……？

妻 (出てきながら) うん、はずしてみたの。

妻は、そのまま、庭へ降りていく。

妻（ヨリコを見て）フッフフ……。

ヨリコ え？ 何ですか？

妻 ヨリコさんがすわってる……。

ヨリコ すわったままうつむいてはにかむような……。

妻は、嬉しそうに笑いつづける。^{*65}

暗転……

*1 書き出しは、いつも緊張するものです。

戯曲をエンビツで書く私は、最初の数行は字もキレイです。そしてすぐに判読しにくい字になってゆくのです。

この『テレビデイズ』の書き出しはなるべく気負わないようにという思いがあらわれているように思えます。ト書きもセリフも、出来るだけサラッとはじめよう、と思っているふしがありますね。『テレビデイズ』というタイトルは、むしろWアレンの『ジ

オデイズ』のもじりですが、その映画を私は観てるわけではありません。

*2 すわっている妻の傍らに立たず、ま数えている夫。妻はその間、夫を振りむき、足先から頭まで見あげてゆく、という演出をしております。妻が夫をそういう風に見る、ということが面白く感じるところです。

*3 これらはセリフの簡略化と

う点から言えば、すたたく？「直接」ですむわけですが、つかない……。「……」

言いに行く……。「と言いつから

それを言うという人間の、無駄と言いま

すか、それこそ簡略化されないと、人間の営みの面白さではないかと……。

*4 上演時には、「こ」で電話のそばを離れてはいけません。受話器を置いたまま次のセリフを言っています。

*6 上演時には、「このセリフのあとに

夫 えっ？

妻 雨後、雨後。

というセリフを足しております。

*7 岸田國士氏の戯曲「紙風船」を

想像して欲しいという作者の下心です。

この作品の宣伝文句、「部では『紙風船』のあの夫婦の十年後を描いた」と盲わせてもらいました。

*8 このエレーナはジュード・ドレフェュスさんが演じたわけですが、彼女はほつておくとモデルさんみたいに覚えてしまうので、衣装を選ぶのに苦労しました。「こ」はジーンズとチェックの綿

の上着、そしてメガネをかけてもらい、「うん、留学生に見える」となったわけです。

*9 「こ」は本来なら、

エレーナが入ってきた

妻 ぐうもお疲れ様

となるべきところですが、状況のスピード感を印象づけるために、「こ」いう書き方をしています。

*10 玄関脇に診察室があつて今は診

察室として使われていない、という家の状況は「蒲団と達磨」という作品で

も使っています。別に私の実家が病院
だったわけでも何でもないので、
何だか、それが好きなのです。

*11 劇作家としての私も、今までは
いぶん多くのノートを使っています。

このエレーナのようなことも時々書い
ているのです。

*12 別にこのセリフに限ったことでは
ないのですが、言わずもがなのこ
うセリフを言ってしまう人間と、そ
の状態が私は好きで、そんなことを感
じてくれる俳優と一緒に芝居をつくっ
ていきたいと思っています。竹中直人
さんは、そういう人だということでは
す。

*13 上演時に、ここは少し笑いな
がら(と)というより、強く否定して(と)
いう風に演じられています。その方が、

ここにいる二人のバラつきが明確に伝
わったと思います。

*14 この下書きは、ついでに書いて
しまったものだとと言えるでしょう。書

かなくてもいいのですが、自分が演出
する時おそくおそく(と)をちやち
やしてしまうと思ったので書いてある
のです。実際、そうしました。芝居と
は面白いもので、例えば(と)というもの
も、(と)だん決まり(と)になるとポケ
ットにティッシュが入ってなかったり
すると、調子が狂ってしまう(と)とい
うものですね。

*15 (と)という時、(と)言ってしまう
人間の状態もまた私の好きなもののひ
とつです。言葉そのものにはほとんど
意味がないと言えるでしょう。

*16 妻とエレーナの会話は、ほとん
ど時間を埋めるためだけのものだった

わけですが、さはいえ、そのことの深さというものも見逃してはならないわけです。ここで妻はやっと具体をともなった言葉を見つけたと言えるでしょう。深いところから浅瀬へ出た感じ、とても言いますか。

*17 清彦には、背広姿で、手さげの紙袋をもつて登場してもらいました。そのアンバランスというか、いいかげんさが清彦らしいと思っただからです。

*18 ジョー・ドレフュスさんの発音が、キャーヒコと聞こえるので、みなでそれを面白がったものです。いや、面白がったのは私だけだったかな。

*19 上演時は、不注意ではなく、注意不足としました。その

方が外国人っぽいと思ったからです。

*20 この花を庭に出していたら、上演を観たお客さんからポインセチアは寒空に出しておくものじゃありません」というお叱りを受けました。

*21 清彦が、そのジャンパーの上ですわってしまっていた、という演出をしております。

そしてあ、「めんなさい」と言った清彦がつづいて大丈夫ですよ、大丈夫」と夫の体をさわりながら言うのです。

*22 出かけようとした夫が、そのセリフを聞いて、廊下で立ちどまった姿が、壁にある穴 方形の窓の向こうに、その腰から胸のあたりまで見える、というところになっています。やがて夫は、部屋の入口のところまで戻って

「や、それは……まだ内緒にしておいたんだけど……」と言っています。

*23 この場所は特定しないのがいいし

て周辺に具体的な地名を出すという方法を私はよくとっています。例外は

『市ヶ尾の坂』という作品くらいで

す。これは完全に特定された場所の話にしています。

*24 エレーナも夫に気づき、少しだけ立っている位置をかえる、という演出をしています。

*25 この時、清彦は、畳の上に大の字に寝る転がつて天井を見ているという風に演出しています。そして次の

間「ところでチラと姉を見て、

たすぐに天井を見るとという風に。さらに、誰のことよ」と聞かれて「ヨリヨリ」と言つて、指でピストルの型をつくらせて天井に向かって「キーン、バキーン」と言うのです。

ちょっと幼い印象になるかもしれないけど」と言つて塚本晋也さんに、そうやつてもらった記憶があります。

*26 新聞をめくりながら、「いや言つ

清彦を姉がチラと見る」という風に演出しています。そう、チラと見る」という時の人間が私は好きなのだ、と言えるかもしれない。台所に立つ妻のうしろ姿を夫がチラと見るとか……。

*27 『F』から『G』に至る暗転の

間に、庭に降りる敷石のところをエレエレーナの靴をセッティングしておかなければならないわけです。心配性の私はよく、「この靴がセッティングされてなかったらどうしよう、などと考えたものです。ただ、その心配も謂れのないものではないはずです。そこにあるべきものがセッティングされてなくて俳優が青くなつた」という話は、これま

での様々な演劇で、枚挙にいとまがないくらいにあるわけですから。

*28この「さ」における夫と妻の関係は、「さ」の後半になつて、はじ

りわかると思いますが互いの目を避け合う関係になっています。もちろん、

十「のふたりの関係がここに至つて

いるというわけです。ですから、「こ

らあたりの会話は、夫婦ゲンカしたふ

たりが、他人のいる前で、オレの腕時

計修理は出しといてくれた?」「出し

といた」「ちつ出来るん?」「明日」

あ、そ「みたいな会話をしているよ

うなもの、と言えるでしょう。ですか

ら、「このあとの、さ、しようがない」

という夫のセリフに面白味があるとい
うことです。

*29そしてつまり、「ここのあたりの妻の陽気
さー」ということになります。

*30この音楽は、マラーの交響曲第5

番の第一楽章を使いました。

*31このあと「ロシア語かな」とい

つて、雪の降る夜は楽しい。ペチカ、

ペチカ燃えろよ燃えろよ。ペチカ」と口

ずさんでくれるように塚本晋也さんに

注文したら、彼がその歌を知らなかつ

たということ、そのメモロアニーをい

つも不正確にうたうもので、稽古場で

ずいぶん笑わせてもらったのでした。

*32或るフランス人のお客さんが、

この芝居で、最も日本的だと思ったの

は、よくティッシシをつかうところ

だ」と言っていました。面白い意見で
した。

*33このあたりの夫の動きは、使っ

たティッシュをゴミ箱に捨てて行き、新聞用のラックにさしてある新聞をぬきとり、読むともなく広げて、「このセリフを言う時、音高くそれを閉じて、ラックに戻す、という風になつてます。」

ちなみに、同じ時間のエレーナは、清彦に憤怒の表情を時おり向けながら、出されたお菓子をバリバリ食っている、という風になつています。最終的に、それがのどにつかえてしまうのです。

*34この状況は、まさに私自身が経験したことです。全然そろわないのでアツタマに来て、銀行にお金をおろしに行こうとパチンコ屋を出た時、そこを通りかかった久しぶりの友だちに会ったのです。久しぶり「などの会話もなく、私は一目散に銀行に向かったのです。」

*35このセリフを言いながらエレーナはむせるのです。お菓子のつめこみすぎで。

*36玄関の方で靴、靴、火の用心「という声が聞こえ、それが笑い声にかわる、という演出です。」

*37姉が弟の財布の中を勝手に見る「とは、この本を書き出す前にすでに、私のノートに記されていたことですよ。いわゆるネタという奴ですね。それも小ネタといふべきでしょう。この手の小ネタが他にもいくつもあります。それはひとつのセリフだったりひとつの状況だったりします。」

*38この仕掛け（？）は、舞台監督の青木さんが、電話をのせてある台の

端っこに丸い木の突起物をつけて下さって、その脇に財布があるようにして、夫がそれづたいに移動すると、財布がおちる、という風にしました。ですから、夫役の竹中直人さんと妻役の原田美枝子さんは、原田さん、財布を戻す時、「これくらい感じて」「ここに置いてくれますか」「これくらい……ハイ、わかりました」「そうですよ、ハイ、おちるようになりますから」「ああ、ハイ」といった会話をすることになるわけです。本番がはじまる前にですね。

*39 ガラス戸が閉まった瞬間に、音楽

が流れるという演出です。「この作品に限らず、私の演出では、暗転がある場合、だいたいにおいて、暗転前から音楽が流れます。その音楽が暗転の間流れつつけるのです。劇中ではほとんど音楽をつかいませんが。

ここではマーラー 第5番の第四楽章 アダージョをつかいました。

*40 このパジャマは衣装合わせでずいぶん迷いました。結局、一番コレヨレ

レの感じの、しかも、小さなものにしてしました。清彦がこの家に住んでいた時に着ていたパジャマにちがいないと思っただけです。

*41 このエレナーナの衣装もです。衣装の勝俣淳子さんは、竹中直人の会「のみならず、私の演出の時、多くスタイリストをつとめて下さっています。

*42 上演時には肩ではなくヒザ頭をたたく、という風によつてます。

*43 上演時には「この野島さん」を

おびさん」にかえています。

*44 記憶が定かではありませんが「スモス」という小説ではなかつたかと思えます。Wゴングプロビッチは私の好きな作家のひとりです。

*45 このフランス語に限らず、劇中のフランス語は、こうして読めばわかるようになっていますが、上演時はただのフランス語です。ですから、観客の中にはホントに「この庭はかわいい」という意だと思った人もいるでしょう。

*46 こういうセリフを書く時、戯曲を書いてある私自身が「なんか声が変わる」と思っている場合があります。タバコの喫いすぎです。

*47 何やら私の初期の町内劇シリーズ（『お茶と説教』『吾所の灯』『恋愛御法度』）の頃のシチュエーションを思い出します。床屋にいつて髪も切らないでしゃべっただけの町内の人。あの頃、私はそういう人たちをひたすら書いちゃいました。とにかく緊張感がないシチュエーションをやるうと思っていたからです。それはそれまでの緊張感でバンバン押してくる演劇に対する私自身の主張でもありました。

*48 壁の穴 方形の窓（参照）から顔を出しました。ちなみに舞台美術は日比野希子さんと、彼女も竹中直人の会「のみならず私の舞台の美術を多くやってもらっています。あの本の装幀もそうですよね。

*49 この声はSFE効果音（では

なく、生の声でやろうということになり、私は野島役は私自身が演じました(この声を出すために、毎ステージ、舞台全体が見えるところから、袖まで行き、また舞台を見るために、戻っていったものです。

*50 この夫のセリフのあとに、上演時には

エレーナ しゅじゅかんけい？

夫 あ、ちょっと考えて(王様と

奴隷で関係ですか……

とつけ加えております。主従関係という言葉が、やはり外国人には耳慣れぬ言葉だろうという判断からです。

*51 書かずもがなのト書きと言えるかも知れません。しかし、書いてしまった。それは作家としての自分の「次の生理」を生み出すため、と言えるかも知れません。「の停滞した時間の中で、次に誰かに言葉を吐かせるために、私自身が、その時間の中に埋もれているものを確認したくなった」ということでしょつか。「どういった長いト書きを月光のつしむ』という戯曲の中でも書いております。

*52 姉と弟のケンカ。私はよくき

ょうだいが出てくると必ずケンカしますね「と言われます。そうですむ「とこたえます。

そのケンカには、だいたいにおいてそこに他人がいます。そのケンカを見せられる他人にしてみれば、そのケンカは何か傲慢な感じ」を感じさせは

しないでしょか。例えば、或る夫婦の家に遊びに行った時、他人の私がいゝるのに夫婦ゲンカをするその夫婦の傲慢な感じとか……。その傲慢という表現の中に、あるいは愛とか、憎しみとか言われるものが潜んでいるのかもしれないですね。

*53 この「なぜ?」というセリフは、上演時には省いています。清彦のあまりの勢いに、すでにその言葉をはさむ要を感じなかったからです。

*54 むろん、このフランス語の応酬は、観客には何を言い合っているのかわかりません。この「テレビ・デイズ」を書く前にやりたかったこと、それがこの、畳の部屋の上で、外国語がび交う、ということだったのです。

以前私の『蒲団と達磨』という戯曲が英語に翻訳されて、それが外国人によって上演されたのを観た時から、それをやりたいと思っていたのです。ちなみに、この戯曲のフランス語部分は、エレーナ役をやったジュリー・ドレフュスさんに翻訳してもらいました。

*55 この「平和」という言葉は、上演時には「平和的」と言っており、稽古中に、ジューさんが、そう言ってしまったのです。それがとても外国人っぽかったので、そのままにしておいて下さい、ということになったわけ

です。
*56 実は、私自身も、電車の中でこれと全く同じ経験をしたことがあります。

ます。この時は、父親の方が先に電車を降りていったのですが、その父親の方が降りてゆく時、それまでずっと無言だったふたりが何か話すだろうと思っただけ……。そう、ホントにごぶたりは他人だったのです。ですから『由の音』をその後読んだ時、ホントにおどろいてしまいました。『由の音』では、読んでいただければわかりますが、この状況に、さらに、深い人間関係を含めて書いてあります。いやあ、ホントに川端康成という作家は……

*57 上演時には、散ったノートを拾い集める時に、昨夜、クリスマズ、ブの残りのクラッカーがおちていて、それを夫が拾って、手に持っている、ということになっていて、ふたりがこんな会話をします。

エレナ それは何ですか

夫 これ、昨夜の……あそこに落ちてて……

エレナ ああ……

夫 これ、フランス語だと何て言うんですか？

エレナ ベター……？

夫 ベターをならします

そう言つて、夫はクラッカーをパンとならすのです。前夜の名残りが欲しいと思ったので、そうしました。

*58 清彦はそう言いながら、姉が片

づけようとしている重箱の中のかまぼこをしまおうとする。その手を姉が、

チンとはたく、という演出をしています。

*59 上演時には床屋さんで聞きませした」ということになっております。

*60 背広に着替えた清彦はこの時、手にミネラルウォーターを持っていきます。ちょっとフランス帰りっぽくていいじゃない」と言つて、塚本さんにそうしてもらいました。

*61 女のたくましい回復力、とても解説すべきセリフかもしれませんが。夫が隣の部屋に入つて戻ってくる間に妻はもう、ささぎの追い込まれた立場から、回復し、いわば日常の状態に、夫もろとも引き込まうとするのです。まずいな、自分で解説してゐる……。

*62 そして、「この時の妻の『微笑み』。

*63 これは、むろん、子どもを出演させることが出来ないという、制作上の問題もありますが、実は私の頭の片隅に、Aキアロスタミ監督の『そして人生はつづく』という映画のことが

ありました。父とまだ8歳くらいの男の子がえんえんと車でどこかに向かう話なのですが、映画の最後の方で、息子が同じ年頃の友だちを見つけ、一緒に遊び出すと、いともあっさり、父は息子を残して、自分の目的のために車を走らせるのです。私は、そのことについてごく感銘を受けたものですから。

*64 私の実家で、こういう風習があったものですから……私以外の俳優さんたちの誰に聞いても、そんな風習は知らない、というのでした。

*65 上演を観ないで、本だけ読んだ人に最後はどうしてあそこで終わるんですか？」

「ヨリコさんがすわってる……っ」
「てのほごういう意味ですか？」と聞かれたことがあります。私はちよつとしょつく次のような卜書きを書くことも可能だったかもしれません。

ヨリコすわったままうつつむいてはにかむような……。

妻は庭の垣根に背をもたれるようにしてそのヨリコを離れた位置から見て笑う。嬉しそうに笑いつづける。

その表情は、官能的といつてもいいだろう。希望と絶望の、優雅と残酷の、愚劣と歓喜の混在する、きわめて性的な表情と言わねばならない。

影はまずヨリコをつつみ、その姿を影絵のように見せて、ほどなく、妻をすなわち舞台全体を暗闇の中にもみ込んでしまう。

暗転 一一一